

---

# ペルソナの笑み

松嶋ネコチロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルソナの笑み

### 【Nコード】

N3804X

### 【作者名】

松嶋ネコチロウ

### 【あらすじ】

笑って誤魔化すのではなく、笑って騙す。絶対に剥がせない笑みを身につけた者は、知らず知らずのうちに相手の心を支配する。でない、仮面の意味がないから。ペンダントが描く歪んだ繋がり。猫の失踪と惨殺体、白く濁った両眼、二つの恋愛とニパツクのたこ焼き。仮面が欲しいと望んだ夜、彼/彼女はとある高校生に出会う。

## 一話

祭りは嫌いだけど、人助けってのはなかなか悪くない。

十月一日。神社の境内では縁日が開かれていた。川向かいの先で大玉の花火があがり、人々は明るい夜空をあおいだ。色とりどりの浴衣と、汗で薄く湿った甚平の群れ。

この場所で高校の制服姿なんて、たぶんあたしだけなんだろうな。今日は文芸部の部誌の仕上げで、遅くまで学校にこもっていた。たった一人で。一応部長だし、他の部員には気を使ったつもりだった。

ソースと汗と香水のまじった独特の匂いがする。鼻がいいせいか、こういうのは苦手だ。

縁日外れの川沿いには枝垂れ柳が立ち並んでいる。そこには女の人がいた。紺を基調とした浴衣を着ていて、柳のたもとで立ち尽くしている。彼女は白杖を手にしている。視覚障害者が使うような伸縮性の安全杖だ。

「どうしました？」

声をかけてみる。いつものあたしなら素通りするところだった。

女性は白杖の先へと顔を落としたまま、「迷子になりました」と言う。表情は、暗くて分からない。

「連れとはぐれてしまっただんです」と彼女は再度言う。

「よかつたら、一緒に探しますよ」

白杖の女性はうつすらと微笑んだ、ような気がした。やはりよく見えない。一緒に探すとは言ったものの、どう連れていけばよいものか分からない。

すると女性が、宙空にゆるく手を持ち上げた。ああ、と納得し、その手を取ってあたしの腕へと持っていく。彼女はあたしの二の腕を掴んだ。

「お連れさん、どこにいそうですかね」

「たぶん、たこ焼き屋さんあたりにいると思います」

人混みの流れから守るように、女性を後ろにたずさえる。

「なんでたこ焼き屋さん？」

「彼は、たこ焼きが大好きなんです。私も大好物なので」

だからって、たこ焼き屋にいると考えるのも安易だろう、と思っ  
たが口にはしなかった。実際、あたしが余計なことを言う必要はな  
かった。連れとやらは、ほんとうにたこ焼き屋の前にいたのだ。

「静香、どこに行ってたんだ」

けっこう格好いい、若い男だった。グレイの浴衣を着込み、胸元  
でシルバーのペンダントを光らせている。白杖の女性を見ると、彼  
女も同じ型のベージュのペンダントを着けていた。

はあ、カップルかよ。

「どうもありがとうございます」

浴衣の男性に礼を言われ、あたしは無駄にどきどきしながらうな  
ずいた。イケメンすぎてまともに顔も見られない。面食いも極めつ  
けだ。

それから軽く、彼らと雑談を交わした。そのあいだ彼は、気遣う  
ように彼女にぴったりと寄り添っていた。

その二人からは汗と香水の独特の匂いはしてこない。視覚障害者  
の彼女のためだろうか、嗅覚の邪魔になるため、彼らは普段から  
香水を使用しないのだという。

「どうしよう、静香。この子になにかお礼をしないと」

白杖の女性は目を閉じたまま（もとより見えないので終始閉じて  
いたが）、ううん、と唸った。

「やはり、たこ焼きがいいんじゃないでしょうか」

「やはり、なんだね」浴衣の男性は短く笑って、「君、たこ焼きは  
好き？」

あたしはまたも無言でうなづく。

彼は屋台のオッサンにたこ焼きを注文する。八個入りを二パック、  
六百円。片方をあたしに渡して、もう一つは彼女に持たせる。

「本当に、ありがとうございます」

二人して頭を下げてる。さつきは、カップルかよ、などと舌打ちしそうになったあたしだが、こうまで懇切丁寧な対応をされると、こちら素直な好意を示さならなければいけない。

「いえこちらこそ。たこ焼き、どうもありがとうございます」というか、普通に嬉しかったし。

帰り道、たこ焼きを食べながら歩いていたら、道中で小峰真由と出会った。真由は薄桃色の浴衣姿で、頭のうしろに仮面ライダーのお面を装着していた。どう見てもお祭り帰りだった。

真由はあたしと同じ文芸部員である。かなり頭の弱い女子だ。愛らしい犬みたいな顔をしているが、チャームポイントのアヒル口とゆるゆるウエーブヘアはあたしに取って目障りではない。

彼女はしきりにあたりをきよるきよると見回し、なにかを探していた。おっす、と声をかけると、真由は涙目をあたしに向けた。

「咲子さあん……」

「どうしたの真由。赤点の解答用紙でも落とした？」

真由は握りこぶしをぶんぶんさせて、「ちがう！」と黄色い声をあげた。

「タコヤキがいなくなっちゃったんだよ！」

「タコヤキ？」

あたしは手元のたこ焼きを見おろした。

「たこ焼きなら持つてるけど。食べる？」

「そのたこ焼きじゃない。食べられない方の、タコヤキ！」

あたしはびっくりして首をひねる。悪いが、こいつが何を言っているのかさっぱりだった。食べられない方のタコヤキ。なんだそれは。なぜなぞ？

あたしがタコヤキの正体を知るのは、それから五分ぐらいかかってしまったのだが、タコヤキとはつまり真由が飼っている猫の名前

らしい。なぜ猫にそんな美味しそうな名前を付けてしまうのかと尋ねたところ、

「頭と背中におっきな茶色の丸ブチがあつてね、背中を丸めるとたこ焼きが二つ並んでるように見えるんだよ。だからタコヤキ」

というこららしい。猫なめんな、とあたしは思う。

「真由、一人？」

「ううん。おじいちゃんと二人で来たんだけど……」

真由ははっとして周囲を見回した。

「おじいちゃんもいない！」

まったくどうしようもない女だった。真由は落ち込んだように仮面ライダーのお面をいじった。ゴム紐を伸ばして、パチン、と音を鳴らす。

「でも、まあいっか。おじいちゃんだし。おじいちゃんなら一人で帰れるよ」

「あ、そう」

「それより、タコヤキを探さないと！」

「がんばれ」

そのまま帰ろうとすると、真由から肩をつかまれた。

「マユ、薄情な咲子さんなんて嫌だな」

「あたしさ、人助けは日に一度と決めてるんだ」

「なんのこと？」

真由は首をかしげる。

「ねえ、お願い咲子さん。もし見つかったら、好きなだけタコヤキ触らせてあげるから」

「まじで?」

「まじで」

その夜、二時間ほど神社周辺を探したが、結局タコヤキを見つけない。出すことはできなかった。

ずっと猫の名前を呼び続けていたので、あたしらの声は少し枯れてしまった。タコヤキ、タコヤキと叫び回る女子高生二人を周りは

どう思っただろう。きっと縁日で浮かれきったアホだと思われたに違いない。

「そういえば咲子さん、どうして制服なの？」

しよんぼり顔の真由から相当遅い質問をされる。

「文芸部の居残り。部誌発行も近いしね」

「そうだったの？ ごめんね、マユも手伝えはよかったのに」

なんだかんだで優しいやつなのだ。同じ文芸部員の堤くんとは大違い。

「咲子さんのことを手伝ってれば、お祭りに来ることもなかったし、タコヤキも迷子にならずに済んだんだ……」

そしてこの落ち込みよう。そもそも、祭りに猫を連れてくるからこうなるのだ。でも、やっぱり可哀想なので、あたしは真由の背中をぽんぽんと叩いてあげた。

「咲子さん……」

真由は今にも泣き出しそうにあたしの目を見つめた。あたしは、やれやれという風に首を振った。

「タコヤキ探し、見つかるまで手伝ってあげるよ」

そう言つと、感極まった真由に抱きつかれた。家に帰ってから、やっぱり猫探しなんか引き受けなきゃよかったと反省するあたしだった。超めんどい。

その翌日。放課後の文芸部の部室で、真由は猫探しのポスターを作っていた。部誌の作業も大して残っていないので、好きにさせておく。堤くんは次回の部誌製作に向け、連載小説の続きを書き始めている。

真由は一時間ほどでポスターを作り上げた。それをあたしに見せてくる。ポスターにはデジカメで撮ったらしいタコヤキの写真が貼られており、猫がいなくなったときの状況と、猫の特徴が詳しく載っている。随所には手書きの猫も描かれていた。あまり危機感が感

じられない、小学生が描いたみたいなのファンシーな猫だった。

まあ、そこまではいいんだけど、問題は他にもある。

『タコヤキを探しています！ 見つけた方にはお礼にクレープを奢ります！』

あたしは頭を抱える。

「タコヤキじゃなくて猫って書かなきゃ分からないだろう。つか、クレープ奢るくらいで誰が協力する？」

「駄目かなあ」

「あと、これもだよ」

あたしはポスターの下方に記載された一文を指す。そこには真由の素性が書かれている。氏名年齢性別、住所に電話番号、在籍校まで。

「個人情報書き過ぎ。世の中物騒だからさ、名前と携帯番号くらいでいいと思うよ。女の子目当てのヘンタイが来ないとも限らないし。それでもいたずら電話くらいは覚悟しなきゃだし、本当は探偵でも通した方がいいんだらうけど、まあそこはお金かかるからね」

「女の子目当ての、ヘンタイ」

「吉村くんみたいだね」

「ああ、なるほどお」

馬鹿な真由でも納得してくれるのだから、吉村くんのネームバリユーも使い方次第である。吉村くんとは、あたしらの同級生で、彼のことを話せば非常に長くなるので割愛するが、総合的に評価して何かと危ない人物であることは確かだ。できればあたしもあまり関わりたくない。

真由は里親探しポスターを直しはじめた。あたしはチュッパチャプスの包装をやぶって口に入れた。キャラメル味。おいしい。

「身近にも協力者がいれば助かるんだけどね」

と、あたしは部屋を見回すが、真由の他には副部長の眼鏡男子、堤くんしかいない。耳栓もしていないのに我々の会話が一切聞こえていないように、自分の物語の世界に浸っている。こいつには端っ



から期待していない。

「マユ、クラスの友達にも声をかけてみる」

「あたしは真由以外友達いないしなあ」

「一匹狼だもんねー」

真由はマジックペンを止めて目を輝かせ、やたら『一匹狼』を強調して言った。真由的には褒め言葉のつもりなのだろうが、ちよつと傷つく。

なんだかんだ言っても人助けつてのは気持ちがいいものだ。二度連続でたこ焼き関連つてのが妙だけど。

「しばらくは二人で探しますか」

「うん！」

それぞれの作業に戻る。あたしは部誌のページにひたすらパンチで穴を開けていく。綴じ紐を通し、緩まないよう穴の縁で閉じていく。残りあと十部というところで、窓の外へと目を映す。

夕暮れの空に、うっすらと満月が見えた。不気味に寒々と、どこか印象的に。

猫の惨殺体が見つかったのは、それから二日後のことだった。

## 二話

たこ焼きみたいな猫を見た、その情報を得たのは、猫失踪当日から勘定して三日目のことだった。

失踪の翌日、翌々日、あたしたちは近くのコンビニやスーパーを歩いて回った。里親探しのポスターをお店に貼らせてほしいと頼み込むためだ。結果は芳しくなかった。商業施設の壁面というものは基本的に広告の激戦区であり、お店側もそれだけで高額な広告代金を受け取れるらしい。バイトすらしていない、一文無し同然の高校生であるあたしたちにとっては、とても不利な話だった。

そこで、町中至るところにある電柱に貼ろうかと画策してみたが、貼っては剥がされ、貼っては剥がされの繰り返しだった。

誰だ、いたいけな真由が作ったポスターを剥がして回る無粋な輩は、と純粹に腹を立てたが、剥がしていたのは町のお巡りさんだった。

「駄目だろう君たち。こういうのは公的な手段で、ちゃんとした許可を得て掲示しないと」

町のだ真ん中で、初老のお巡りさんに叱られた。真由は泣きそうになっていた。あたしは静かに怒りを込めて反駁した。

「その公的な手段だってお金がいるんですよ。事あることに金を出せ、やれ金を出せって。子供のうちらには生きにくい世の中だよ、まったく」

「君たちには保護者というものがいないのかい？」

お巡りさんはあたしを横目で見ながら鼻で笑った。最近の高校生は反抗的で困る、という意味を含めての嘲笑だった。

あたしも真由もまともな保護者なんていねーよ、と言いたくなかったが、これ以上は無益な水掛け論だった。それに、そもそものはこつちにあるので、あたしらは黙ってうつむくことしか出来なかった。

学校の向かい、国道を挟んですぐのところにはクレープ屋がある。派手なバンドナを着けた馬鹿そうなアルバイトがいつも一人で立っている、寂れたワゴン車の屋台だ。

その日、ついに万策尽きたあたしと真由は、そのクレープ屋台のベンチに座り、テンションが落ちでクレープを頼張っていた。真由は一度、ここの激辛クレープで腹を壊した経験があるので、今日は普通のバナナクレープを食べていた。

真由はスカートのポケットから折り畳んだポスターを取り出した。しわを伸ばしながら広げ、タコヤキのデジカメ写真を見て、ため息を吐く。

「タコヤキはたぶん、もう寿命が近かったんだよ。死ぬところをマユたちに見せないように、自らすすんで姿を消したんだ。だって、タコヤキが死んだら、マユもおじいちゃんもぜったい泣くもん。ああ、なんて心優しい猫なのかしら」

真由は鼻をすすって、もう一度ため息を吐いた。鼻頭は真っ赤になっている。

あたしは真由を元気づける言葉を探した。まだ、完全に可能性がなくなつたわけじゃないのだ。

「それなただけどさ、タコヤキって本当に自分からいなくなつたわけ？ 実はあたし、もうひとつ納得できないところがあつてさ」

真由の手からポスターを取りあげて、気になっていた一文を示した。猫がいなくなったときの状況についての記述だった。

『ちよつと目を離れた際に、タコヤキはいなくなりました。それまで普通に遊んでいたただけなのに……』

「遊んでいたつてのはつまり、何をして遊んでいたの？」

真由はクレープをかじりながら斜め上を見あげる。慎重に記憶を掘り起こしているようだった。

「えつとね、神社でね、おじいちゃんと縁日で買った水ヨーヨーで

遊んでたの」

「なにそれ。遊んでたって、おじいちゃんとじゃん。そのあいだタコヤキはどうしてたの」

「タコヤキはね、男の人と遊んでた。かわいい猫ですわね、触らせてください、って言うてきたから、はいどうぞって。男の人にタコヤキ触らせてるあいだ、暇だからマユ、終わるまでずっとおじいちゃんと遊んでたの。んでね、ああ、水ヨーヨー楽しかったねっておじいちゃんと二人で、」

「ちよつと待て」

あたしは急な頭痛を覚えて話の腰を折る。男の人。ここに及んで、真由の口から初めて出た言葉だった。それから制止する手を降ろす。

「はい、続き」

「で、水ヨーヨー楽しかったねって、おじいちゃんと二人で帰ったの。その途中で、あれ、タコヤキどこだ、ってなって。神社に戻ったけどいなくて、おかしいなあって探し回ってみただけど、やっぱり見つからなくて。そのうち、たこ焼き持った咲子さんに会ったんだよ。そしたら咲子さん、なんて言ったと思う？」

「赤点の解答用紙でも落としましたの？」

「そう、信じられないよね！」

「信じるもなにも……」

この女には、決定的な何かが抜けているらしかった。全てを突っ込むのは面倒なので、一番重要な部分から指摘してあげる。

「それ、失踪じゃなくて誘拐だよな。猫誘拐」

「なんで？」

ついにあたしの堪忍袋の緒はブチツときてしまった。今日こそそのアホ面をぶん殴ってやる、と拳を握る。すると、背後で「あー」とすつとんきような声があがった。

「それ、あれっすよね。猫みたいなあれ。なんつーか、たこ焼きみたいなあれ。自分、この前見たっすよ」

振り返ると、クレープ屋の兄ちゃんだった。あたしが手にした猫

探しのポスター指さして、ぼりぼりとバンダナ頭を掻いた。

「自分、その猫見たっす。マジで」

「見た。どこで？」

あたしは睨み顔のまま問い返す。クレープ屋の兄ちゃんは終始バンダナをいじりながら話した。

「そのの、ほら、はんばねえマジでつけえ公園。カノジヨと散歩してたんすけど、その猫、見たんすよ自分。ミニモアイがいる広場んとこ。ベンチで美人なネーチャンが座つてて、その膝に猫が乗つかつててさ。んで、ネーチャンも猫も眠つてた。あの猫、たこ焼きみたいだなーとか、つかあの女イケてんじゃないんとか思ったんで、自分よく覚えてるっす。まあ、そのあと、女に見とれ過ぎてカノジヨに引っ叩かれたっすけど」

勘弁っすわマジで、とバンダナ兄ちゃんは語る。およそまともな日本語とは言い難い説明だが、彼の言いたいことはよく伝わった。

あたしはクレープの包み紙をゴミ箱に放り、レモンキャンディーを口に入れて立ち上がる。真由も慌ててベンチを立つ。

「どこへ行くの？」

あたしは答えなかった。彼の話聞いて理解できない時点で、真由に説明するのは骨が折れそうだと踏んだ。

言い忘れたことがあって、あたしは振り返る。バンダナ兄ちゃんに向かって、「ありがとー」と手を振った。

兄ちゃんは憎たらしい笑みで親指を立てた。

バンダナ兄ちゃんの言う、『はんばねえマジでつけえ公園』とは、おそらく真白ヶ丘森林公園のことだろう。

真白ヶ丘森林公園とは、あたしたちの住む真白ヶ丘市、ひいてはこの県が誇る名物的観光地である。約二百ヘクタールの敷地は一日かけてやっと歩き回れるほどの広さで、ウォーキングコースも迷路のように入り組んでいて複雑だ。たしかにはんばねえし、マジでっ

かい。

さらに彼は、ミニモアイのいる広場でたこ焼きみたいな猫を見た、と言った。美人な女と一緒に。

あたしはミニモアイ広場についての事前知識を思い起こす。たしかあそこは、野良猫のたまり場として有名な広場だ。広場周辺に木天蓼、いわゆるマタタビの木が自然林立しているためだという。どっかのホームレスが植えたマタタビの苗がそのまま育ってしまったのだ。はた迷惑な話である。

それにしても迂闊だった。そんなあからさまな場所の存在を知っているながら搜索の手を伸ばし忘れていたとは。

タコヤキ誘拐の犯人は、どういう理由からかは知らないが、一時的にそこに留めておくためにタコヤキをミニモアイ広場へと運び出したのだろう。

それにしても不可解なのは、バンダナ兄ちゃんが猫と一緒に見たという女だった。彼女は一体何者だろう。ただ猫を愛でただけの部外者ならいいのだが、もっと詳しく聞き出しておけばよかったたとえば、その女の特徴とか、目撃時の日時とか。

「咲子さん、待って。早いってば」

考えごとをしながら歩いていたら、後ろから真由が小走りで追いかけてきた。彼女の顔を見ながら、あたしはもっと聞き出さなければいけないことがあったと気づく。

「真由さ、タコヤキは男の人と遊んでた、って言ったよね。その男って、どんなやつだったかな」

「どんなんて……」真由は息を整えて答える。「格好いいひとだったよ。美青年系のイケメンみたいな。マユのタイプじゃないけどね。でも、変なオジサンとかだったら、マユ、ぜったいタコヤキのこと触らせなかったもん」

「分かるわその気持ち」

あたしは少しの間を置いてから訊く。

「そいつ、どんな格好だった？ グレイの浴衣にシルバーのペンダ

ント？」

真由は臉をぱちぱちさせて、深くうなずいた。

「咲子さん、すごーおい。そう、たしかにそんな感じだった。よく分かったね。すごい。なんで分かったの？ エスパー咲子？」

無視して公園敷地に入った。

森林浴コースを通り、整備の行き届いていない獣道じみた林道を歩いていく。その頃にはあたりは真っ暗になっていた。池のほとりで鈴虫が鳴きはじめ、満月が水面に反射している。満月の光も、やがてマタタビの木々にさえぎられる。

ミニモアイ広場に到着する。広場一帯に、野良猫の夜鳴きがこだましていた。草むらの奥からいくつかの眼が光っていた。まるで和製ホラー映画のワンシーンのようだった。

「なんか、不気味なところだね……」

真由はそれつきり口を閉ざした。あたしの背中にぴったりとくつき、恐怖から耐えていた。この物々しい光景は、どんな猫好きでも逃げ出したくなるほどの効果を有しているようだった。

はつとして、あたしは耳に意識を集中させる。ある異変を聞き取ったのだ。無数の鳴き声の中に、悲鳴のようなものが混じっている。獣のような悲痛な声だった。

風が吹き、木々と草むらが揺れる。悲鳴がかき消される。焦らないように、じっと風を待つ。

風が止む。再び音を聞きつけ、あたしはそちらへと駆けた。真由があたしの名前を呼ぶ。構わず走る。ひどく暗かったので、モアイ型のベンチにつまづきかけた。体勢を持ち直し、音のした草むらへと入った。

草むらの奥で、懐中電灯が落下した。誰かが明かりを取り落とし、瞬間だった。次の瞬間、あたしはその誰かと肩からぶつかるとおそく人間だった。華奢で柔らかい、人の肌の感触。

尻餅をつきながら、ぶつかってきた者を目で追う。どうしても姿が確認できない。林で月明かりが隠されている。

立ち上がって、即座にそいつを追いかけたかった。でも、あたしはそうしなかった。

さきほど、懐中電灯が落下した方から、すえた臭いを嗅ぎつけたからだ。あまりの悪臭に顔をしかめながら、おそろおそろそちらへと顔を向ける。懐中電灯の明かりに照らされ、あたしは地面に赤いものを見た。

這うように地面を移動し、懐中電灯を手に取る。その場を照らした。

よく分からない肉の塊がそこにあった。それが第一印象。しかし、ただの肉塊と呼ぶにはあまりにも原型を留めすぎている。それには顔のようなものがあり、足のようなものがあり、脊椎動物特有の骨格をありのままにしていた。地面に横たわったまま、弱々しい呼吸をしている。その回りには、赤く染まった毛皮の破片が散らばっている。

皮を剥がされたんだ、とあたしは直感する。

一分ほど眺めていたら、後ろから悲鳴があがった。真由だった。

「タコヤキっ……」

彼女は叫ぶ。ほんとうに、あれはタコヤキなのだろうか。いやそもそも、これは猫なのか？ 特徴とされるたこ焼きのような毛並みは、文字通り身ぐるみ剥がされている。小型の犬か、狐やイタチとすることもあり得る。

真由は、皮剥ぎされた動物へと駆け寄ろうとする。あたしはその背中に抱きつき、引き留めた。

「離してよっ、タコヤキ、死んじゃうよっ……」

あれはタコヤキじゃない、そう言ってあげたかった。あたしは口を嚙む。本当にタコヤキだったらどうする。何にしてもあたしは、あの死にかけの動物を見捨てようとしているのだ。たとえ善意だとしても、真由はきつと理解してくれない。



動物は、やがて息絶えた。

真由は地面にへたり込んですすり泣いている。異臭がまたひとつ増えていることを知る。真由は、地面へと嘔吐していた。泣きやむまで抱きしめてあげるつもりだったが、彼女はいつまで経っても泣き止まなかった。

無意識に真由の手を握る。そこで、あたしは彼女が手にしていたものに気づいた。握力のゆるんだ指から抜き取り、懐中電灯の明かりでそれを晒す。

ペンダントだった。シルバーで細長い、長方形型のペンダント。そこには美しい蛇が刻印されていた。息を整えてから、ゆっくりと裏返す。

裏には、アルファベットの文字が刻まれている。そうしてあたしは息を呑む。二度か三度か、ペンダントの裏を見返す。手掘りの刻印で、『SHIZUKA』と記されていることを確認する。

「静香」と、あたしは読み取る。

### 三話

あの夜の直後にも関わらず、真由は遅刻もせず健気に登校してきた。

真由はじつと机に張りつき、視線を窓の外へと向けている。友人が声をかけてきても、教師から出席簿で頭を叩かれても、真由は一切として反応を見せず、病んだ空気をららんと発露していた。

真由は教師からカウンセリング室への移動を要請され、さらに一時間後、早退を命じられた。

昨晚の動物の皮剥ぎ惨殺体は、今朝のローカルニュースには取り上げられなかった。当然だ。あたしらは警察に通報しなかったのだ。真由を家へ送ったあと、あたしはガーデニング用のスコップとゴム手袋を手に現場まで戻り、小一時間かけて墓穴を掘った。動物の死体を埋め終わると、腕時計の短針はとうにてっぺんを過ぎていた。というわけで、今日はとても眠い。

携帯電話に着信があった。放課後になって女子トイレの個室に入り、着信履歴から掛け直す。三秒で吉村浩介は電話に出た。

『真由ちゃん猫がいなくなったそうだね』と彼は言う。

『よく知ってるね。吉村さんに話した記憶はないんだけど』

『が、昨晚の事件については知らなさそうだ。もし彼がその事件を知っていれば、真っ先にそこから食いついてくるだろうから。』

『これから暇？』

『たいへん忙しいですね』

『話がある。いつもの所へ行こう』

話を通じない。いつもの所つてのは多分、喫茶店ソレイユだろう。あたしはまだ二回しか行ったことがない。いつもの所と呼ぶには気が早過ぎるような。

寝ぼけ眼をこすって口を開き、きつぱりと断ろうとするが、思い直してそのままあくびをした。喋るのも面倒くさかった。もう電話切ろう。

そのとき、個室のドアがノックされた。

「入ってまあす」

『知ってる』

恐ろしさのあまり思わず通話を切った。そつと、ドアの鍵を解錠する。

ドアを開けると、そこには携帯を耳に当てたままの吉村くんが立っていた。狐みたいな細目で笑い、便座カバーの上で足を組んで座るあたしを見下ろす。念を押して言うが、ここは女子トイレだ。

「ヘンタイ」

「お詫びに飴を買ってあげよう」

「許す」

ちようどよく女生徒三人組が入ってきて、ちよつとした騒ぎになった。

昔ながらの駄菓子屋で激レアな牛乳寒天飴を二袋買ってもらった。喫茶店ソレイユまでの道のりを進んでいると、途中で個人経営らしきジュエリーショップを見つけた。その店の前で足を止める。吉村くんは、突如立ち止まるあたしを迷惑そうに一瞥したが、それでも歩みを続けた。あたしはお店に入る。吉村くんは苛立たしげに足を踏み鳴らして引き返してきた。

ショップ店員の明るい笑顔に迎えられ、店内を徘徊する。吉村くんが無言の圧力を背中からかけてくる。気にしないようにする。

ペアアクセサリーの展示棚を発見した。ペアアクセサリーとは、仲の良いカップルが具体的な愛と絆を手に入れるために購入していく商品だ。見ているだけで恥ずかしい。

棚の表示に『刻印無料のペアネックレスはコチラ』とある。そち

らに目を移す。一對のペンダントが展示されている。昨日、あたしが偶然入手したペンダントによく似たタイプのものだ。

すると、シヨップ店員が忍び足で近づいてきた。あたしと吉村くんの顔を見比べ、いくらか確信したように言った。

「なにかペア商品をお探しですね？」

しまった、と思った。吉村くんが思案顔であたしを見る。二人からの視線がやけに重かった。咳払いをひとつして、あたしは笑顔を作る。

「こういう品物のことで、ちょっと質問が」

「はい、なんででしょう」

「二人一緒に着けるわけじゃないですか、こういうの」あたしは柵の表示を指した。「ここに『刻印無料』って書いてありますけど、普通は、相手の名前を入れるわけですよね」

「そうですね。大抵の方はそういう刻印を注文されます」

彼女はどうかやら、買い取り客を掴んだと勘違いしているらしい。そういう、若干高揚した口調だった。悪いとは思いつつもあたしは再度確認を取る。

「たとえば彼、浩介くんって言うんですけど。もし彼とペアで買うとして、あたしの着けるペンダントには浩介って掘って、彼が着けるペンダントにはあたしの名前を掘るんですよ。それが一般的？」

「そうですね。あ、もしかしてペンダントをお探しですか？」

「ご予算はおいくらほどでお考えでしょう」

「いえ、その」

「学生さんのカップルにはこちらが人気ですよ。ほら、二つくつつけるとハート型になるんです。可愛いでしょう。お二人にもぴったりにかと」

あー、もうだめだ死ぬ、と思ってあたしは軽く手を振った。

「あの、ごめんなさい。今日は見にきただけなんですよ。じつくり二人で話し合ってみて、それから決めようかなって。なんで、また今度みたいな」

「そうなんですか……」ショップ店員は残念そうに相づちする。「でも、その方がいいかもしれませんね。こういうのって案外重要ですから。愛の価値は無機物なんかには左右されないって言うけど、私はそうは思いません。形があるっていいことなんです。相手の姿を偶像的に見せてくれますからね。だってそうでしょう、愛というものは、」

「行こう、浩介くん」

吉村くんの背中を押して無理やり店から飛び出す。どんだけ恥ずかしいこと語り出す女なんだよ、と思いつながら。

額の汗を拭う。あたしの顔面は、汗と火照りでのっぴきなならないことになっていた。

「浩介くんか……」

隣で意味ありげな呟きが聞こえた。もう知らん。あたしは顔を逸らして歩き出した。

喫茶店ソレイユに入ると、不良風の高校生店員に、また来たのかよ、というような顔をされた。三度目の入店にして顔を覚えられるのは結構なことだったが、仮にもこっちは客である。

アイステイー二つを注文した。待っているあいだ、吉村くと無言で木製テーブルを挟む。彼は、さっきのジュエリーショップでの件について何も訊いてこない。ただ、複雑そうな愛想笑いを向けてくるばかりだった。なので、あたしは自ら誤解を解きにいく。

「さっきのことだけど。あたし、友達に相談されてさ。ペアネックレスについて。好きな人が出来たんだって、その子。なにかプレゼントしたいらしいんだけど、どうなのがいいのかなって、そういう相談で」

「咲子さん、友達いないじゃん」

「真由がいる」

自分で言っけて泣けてきた。

「真由ちゃんに好きな人が。飼い猫がいなくなった今の状況で？」  
彼の瞬発的な読みの深さには未恐ろしいものがある。それからあたしは、口八丁の嘘八百で吉村くんを騙しにかかった。ときおり事実を挿入し、信憑性には細心の注意を払う。

まず、真由とともに猫のタコヤキを探し回ったことはありのままに語った。気をつけるべきポイントはそのあと。すなわち、動物の皮剥ぎ死体と、その犯人とおぼしき人物についてだ。この一連の出来事は伏せて話した。

なぜかというところ、やはりそこは真由のためだった。吉村くんがこの話に興味を持ってもらっては困る。彼は、事件という言葉を女の子の次に好むのだ。好き勝手に事件をかき回されて、また真由を混乱させたくはない。

あたしは慎重に嘘を吐く。真由はもう、いなくなった猫をそれほど心配していないのだ、ついでにペアネックレスの相談を持ちかけてくるのだ、と。

吉村くんは半信半疑の表情を浮かべた。というか、明らかに信じていなかった。

「まあ、いいけど」

口先だけの納得をして、また不安げにあたしを見つめた。

「結局、咲子さんは僕に気があるわけじゃないんだよね？」

「うん、まあ……」

どうしてこんな反応をされなければいけないのだろう。あたしに好かれるのがそんなに嫌か？

吉村くんはほっと息を吐く。

「ならいいんだ。よかった。実は僕も咲子さんに相談したいことがあって。これでやっと話せるよ。だからここに連れてきたわけだから」

そこでアイステイラーが運ばれてくる。おまたせしました、という不良風店員の無愛想な接客文句。店員がいなくなるのを見計らい、吉村くんが神妙な面持ちを作る。あたしはもう、吉村くんが何を言

うのか悟ってしまった。

「単刀直入に言うけど、僕ね、いま恋をしているんだ」  
「やっぱり。なんかすごい時間を無駄にしている気がする。」

「一応聞くけど、相手はどんな人かな。ロリコンはもう卒業した？」  
「うん。今度は年上の女性」

吉村くんはストローなしでアイスティーを傾ける。一気に三分の一まで減らした。彼が興奮している証拠だった。

「たまたま、とあるカフェで出会ったんだ。都内のお洒落なブックカフェだね。一人、彼女は本を読んでいた。膝の上に、茶ぶちの猫を乗せて」

茶ぶちの猫、とあたしは心の中で反芻する。

「とても綺麗な女性だった。一目惚れとはああいふことを言うんだろう。入店一分以内に僕は話しかけた。というかナンパした。そうして僕は、そこでやっと気づいたわけさ」

吉村くんは一度後ろを振り返り、光を一身に浴びるオーブンテラスを流し見た。感傷に浸り、もったいぶるように間を置く。

「咲子さん、恋には障害が付きものだよね」

「かもね」

「しかも僕らの場合、障害はとても具体的な部分にある」

「つまり？」

「彼女、目が見えないんだ」と吉村くんは言う。「読んでいた本と  
いうのは、実は点字の本だった」

徐々に、あたしの思考がまとまっていくのが分かった。

「その人の名前は？」

「静香さん。洗礼された美しい名前だろう」

「そうですね」

言いながら、あたしはポケットに手を入れる。昨晚手に入れたシルバーのペンダントを取り出した。木製テーブルの下に隠し、吉村くんには見えないようにする。ペンダントに刻まれた『SHIZUKA』の文字を見ながら、いくつかの疑問と矛盾点を整理していく。

そうして決意を固めた。

この一件は、あたし一人で解決してみせる。

「そのブックカフェ、あたしにも紹介してよ」

吉村くんはまた、さっきの疑り深い目をした。

「僕、修羅場は嫌だよ」

くそ。



## 四話

翌日の放課後になって、吉村さんと堤くんのいるE組の教室を訪れた。扉の影からのぞき込む。堤くんはいるが、肝心の吉村くんはいない。

堤くんと目が合ったので、目立たないように手招きをした。彼は面倒くさそうに廊下に出てくる。

「吉村くんは？」

堤くんは怪訝な顔で答える。

「HRが終わった途端、一目散に教室を出ていった」

「そっか。どこにいったんだらう？」

「俺が知るか。俺がというか、このクラスの誰に訊いたって分からんだらうよ」

「まあ、仕方ないね」

吉村くんには昨日ちゃんと予約入れたんだけど。静香さんが通っているというブックカフェに連れて行ってってくれって。

「用件はそれだけだな。さっさと文芸部に行くぞ。今日は図書委員との会議で忙しい」

眼鏡のつるはしの位置を直し、堤くんは自己完結に会話を打ち切って踵を返す。おいおい、とあたしは思う。まだ話終わってないよ。待とう、堤くん。その部活のことなんだけどさ

堤くんは足を止め、ぎろりとあたしを振り返った。あたしは出来る限り申し訳なさそうに言う。

「図書委員会議だけど、堤くん、うまいこと一人でやってくんない？ あたし、今日は野暮用があつてさあ」

堤くんは諫めるような目つきをしたが、やがて、呆れ返るように肩をすくめた。

「幽霊部員の田岡は素行不良で停学中。新入部員の小峰は失踪した猫の件で心を病みダウン。部長の日野は吉村の尻を追っかけてさば

りか。やれやれ、文芸部もとことん地に落ちたな」

耳が痛い。そして腹が立つ。この男はあたしをその辺の尻軽女か、脳天気な馬鹿ギャルと同列に扱ってくる。同列というか、アホそのものだと思っているかもしれないが。

あたしだつて好きで吉村くんに会うわけじゃない。こっちにも事情があるのだ。そろそろがつんと言いつ返しなきゃなんだけど。

「ほんと、ごめん。この埋め合わせは必ずするから」

肩身が狭い。まったく誰だ。学生は気楽でいいなあなんてほざくやつは。うちの兄貴か。

「もういい、行け」

「はい、マジすんませんした」

堤くんと別れて、学校を出る。

裏門へ向けて歩きながら吉村くんに電話をかける。いくら待っても出てくれない。舌打ちしながら携帯を閉じると、すぐにメールを着信した。吉村くんからだ。

『呼び出しを食らってるので今は出られません。悪いけど、終わるまで待っていてもらえますか？』

彼にとつての呼び出しとは、おそらく教師からではない。女子だ。どうしてあんなのがモテるのか納得できないが、理解はできる。要は擬態の上手さと、元来から持ち合わせているミステリアスな雰囲気、気のせいだろう。まともな女子なら単純に気味の悪い印象しか受けないのだが。

もういいやと諦める。これ以上余計なことを考えないようにする。暇つぶしの検討をつけ、あたしは裏門を抜けた。

森林公園に着き、園内を歩きながら、これまでの情報をシークエンスに整理する。

十月一日。これが真由の猫、タコヤキが失踪した日だ。

この日、神社境内とその周辺では縁日が開かれていた。話による

と真由は、グレイの浴衣を着た男にタコヤキを預けたのだという。

真由と真由のおじいちゃんは、そのことをすっかり忘れ、タコヤキが自らいなくなつたと勘違いした。二人ともボケているんだ。タコヤキはそのまま、浴衣の男に誘拐されたと考えて間違いなさそうだ。

あの神社から森林公園までは、商店街を通るだけで、徒歩で十分もない。浴衣の男はタコヤキを持ち去り、その間、静香さんを一人にさせた。それからしばらくして、静香さんはあたしと出会うとうわけだ。

真由が浴衣の男に猫を預けたのは、おおよその目算をつけて、あたしが静香さんと浴衣の男に出会った一時間前くらいだと推測する。そしてあたしは、二人の着けた同じ型のペンダントをたしかに見た。彼がシルバーで、彼女がベージュだったはず。白杖の彼女、静香さんを助けたお礼にたこ焼きを受け取り、帰り道で真由に会った。それから三日間、あたしは真由のタコヤキ探しを手伝った。真由の猫探しポスター作りはほとんど徒労に終わってしまったが、最後の最後に、そのポスターをきっかけにクレープ屋の兄ちゃんから有力情報を得た。

『その猫、自分見たつす、マジで。そこのはんぱねえマジでつけえ公園でさ。ミニモアイ広場のベンチに美人なネーチャンが座つてて、その膝に猫が乗つかつててさ。んで、ネーチャンも猫も眠つてた』美人なネーチャンは猫と一緒に眠っていた。この辺りであたしはうつすらとした疑いを持つ。猫はともかく、ネーチャンとやらは実際、眠っていたわけではないんじゃないか。

もし、ただ目を閉じていただけだったとしたら。クレープ屋の兄ちゃんも、彼女が眠っていたように見えてしまったのだろう。

偶然にも、これとよく似た状況を吉村くんも目の当たりにしている。都内のブックカフェで、膝の上に猫を乗せた女性と出会つたという。実は、彼女は視覚障害者だったのだと吉村くんは話した。

二人の話でさらなる共通点があるとすれば、どちらの話にも登場

する猫の特徴が類似していることだった。背中に大きな茶ぶちの猫といえ、真由のタコヤキにそっくりだ。高い可能性で女性は同一人物であり、恐らくあたしの出会った静香さんだと考えていい。

タコヤキの失踪経緯と所有先を考えると、誘拐したのが静香さんの彼氏で、現在所有しているのが静香さんということになるだろうか。明らかに二人はペアだ。言い換えれば共犯。

それにしても意図が見えてこない。というのは、ミニモアイ広場で見たあの皮剥ぎされた動物の死体だった。

あれをやったのは例の彼だとあたしは思っている。実際、あの場で真由が、『SHIZUKA』の刻印が入ったシルバーのネックレスを拾っている。この偶然を疑わずにはいられない。

少なくとも、静香さんじゃないだろう。現場には明かりがついたままの懐中電灯が転がっていた。普段から視覚に頼らない生活をしておいて、いくら暗闇だからって明かりを必要とするだろうか。

だから実行犯は彼女じゃない、と思う。

いまいち確信が持てない。いらいらする。あたしはペコちゃんキヤンデイのメロン味を噛むように舐める。

彼女が実行犯じゃないと思いつくことは簡単だが、それを阻害するのは、犯人とぶつかったときの感触だった。あのとき、あたしは肩から腕にかけて大きく犯人と接触し、転ばされた。華奢で柔らかい、女の肌の感触だった。

そこにくると、落ちていたシルバーのペンダントと矛盾してしまう。あれには『SHIZUKA』と掘られている。シルバーは男が着けていた方だし、ジュエリーショップ店員も言っていた。ペアネックレスは、普通は相手の名前を掘るものなんだった。

彼を疑うのが妥当だろう。女のような肌の感触なんか忘れてしまえばいいのだが、どうしても頭から離れない。

気づけばあたしはミニモアイ広場にいた。またずいぶん歩いて

きたみたいだ。モアイが寝そべった奇妙な形のベンチに腰掛け、ペコちゃんキャンディを多分、三本くらい消費していた。なんだか味わった気がしない。

携帯を開くと、吉村くんからメールを二件受け取っていた。一件目。

『終わったよ。告られちゃいました。後輩の女の子。結構いい子だったし、いつもならOKするところだけど、彼女も運が悪かったね』  
文末にげんなりした顔の絵文字付き。うざい。二件目。

『咲子さん、いまどこ？』

現在地を書いたメールを送信した。思い出して、『迎えにきてください』という内容のメールも送る。文句を垂れるような返信がくる。ミニモアイ広場は公園最奥地だからだろう。仕方ない、あたしは待たされたことに怒っているし、まだ考え事があるので今は死んでも動きたくない。

皮剥ぎ事件の犯人について、考えられる可能性をいくつか挙げてみる。

一つ目は、静香さんの彼氏の単独犯という可能性。あたしが感じた違和感を排除すればごく自然な流れになる。なぜ猫を誘拐したり動物の毛皮を剥がなければいけないのか、現時点では想像もつかないので考えないようにする。

二つ目は、これまでに登場しなかった女性である可能性。これならあたしもすつきりする。ところがこの説だと、現場に落ちていたペンダントを無視することになる。絶対的な証拠とは言えないないが、見つけてしまった以上、考慮しておくべきだ。したがって、例の彼以外の男性である可能性はあたしにとってメリットを感じない。情報がなさ過ぎる。

三つ目は、皮剥ぎ事件もあの二人の共犯だということ。あたしがぶつかったのは静香さんで、彼の方は姿を確認できなかつただけだ

と考える。だが、視覚障害の彼女を連れて二人でやるのは効率的じゃないし、二人でしななければいけないという必要性を感じない。

四つ目は、静香さんの単独犯。

キャンディを食べ尽くした。口が寂しい。吉村くん、まだかなあ。四つ目は、つまりどういうことか。念のために掘り下げてみる。

懐中電灯のフエイクと、ペンダントの物証錯誤。

静香さんは、実は目が見えている？

だったとして、どうして普段から視覚障害者を装っているのだろう。この犯行のためだけのお膳立てでもあるまいし。あたしらが目撃できたのは、ほんの偶然でしかない。

そのとき、ミニモアイ広場に初めてあたし以外の人間がやってくる。吉村くんだった。ものすごい疲れた顔をしていて、何故か野良猫を一匹抱いている。ネズミ色のかわいい猫。

「なにその猫。あたしにも触らして」

「だめ」

吉村くんは、相当懐いてくるらしい野良猫の喉をくすぐった。あたしの隣に座り、深々とため息を吐く。で、あたしが猫へと伸ばした手を払った。

「なによ。ちよつとくらいいいじゃんか」

「ていうか、咲子さんさあ」

「なに」

小首を傾げる。

吉村くんは責めるような目で、「ブックカフェ、もう閉店してるから」と言った。

見上げると、空はもう暗くなっていた。少しだけ太った半月が木々の間からのぞいている。あたしは足裏に溜まった疲労感を無碍にしたらしかった。

堤くんの顔を思い出して憂鬱になる。これ、部活さばらなきゃよかったじゃん。

「咲子さん、なんか僕に隠し事してない？ 最近、僕の方が咲子さ

「んじ振り回されてるよじな気がするよ」  
「別に……」

## 五話

翌日の水曜日。

話によれば、吉村くんがそのブックカフェで静香さんと知り合ったのは同じく水曜だったという。

そして翌週、翌々週の水曜日にも彼女はそのお店に居たそうだと。静香さんに会いたいなら、今日この日に行くのが可能性として妥当であろう、と吉村くんは教えてくれた。

ちょうど部活も休止日のため、学校帰りに吉村くんと駅前で待ち合わせをした。なぜ一緒に駅まで向かわないのかというと、吉村くんはHRを受けてないんじゃないかってくらい学校出るのが早いのが一つと、あとは昨日の堤くんよろしく、吉村くんとヨリを戻したんだと周りから思われるのが嫌なだけだった。あたしは周囲から突出することを良しとしない。

京王井の頭線で渋谷まで、それから東京メトロの路線を右や左と乗り換え、やっと目的の駅に到着した。

神保町とまではいかないが、その駅周辺は古本露店や學術書店が建ち並び、それなりに情緒溢れる本屋街だった。地下駅の東口から歩いて数分、そこにある商業ビルのペナント二階を吉村くんは示した。

『ブックカフェ・カワシマ・ギャラリー』

階段入り口、グリーンの立て看板にそう明記されていた。

「駅からすぐとはいえ、目立たない場所にあるだろ。僕がこのカフェを見つけたことが奇跡なら、静香さんと出会えたことは運命とでも呼ぼうか」

「なに言ってるんの、きもちわるい」

吉村くんはいささか傷ついたような顔をしたが、あたしは知らない顔でビルの外階段へと向かう。きもちわるいは、ちょっと言い過ぎたかもしれないけど。



いや、そもそも悪いのは吉村くんなのだ。場所さえ教えてくれればあたし一人でここまで来たものを、吉村くんは自分も着いていくと利かなかつた。あたしと静香さんが吉村くんを取り合うとも思っているのだろうか。うぬぼれめ。

二階に上がり、カワシマ・ギャラリーの扉を開く。からん、と幾分チープな音がした。

レジカウンターの台を布巾で磨いていた男性が、はたと顔をあげた。

「ああ、いらっしやい」

店員だろう。彼は意外そんな反応を見せるが、すぐに接客用の笑みを取り繕う。

制服の高校生二人組の入店がそんなに珍しいだろうか。訝しんであたしは店内を見回す。店内は長方形に奥まっており、照明が明るいせいか気持ち広く見える。予想に反して客は一人もいない。頭上で回るファンだけが、粛々と音を立てていた。

「悪いね。今日は、お店の事情でもうすぐ閉まっちゃうんだ」

「事情？」と吉村くん。

「うん。店長のお父さんが危篤で、いつもより二時間早い閉店だよ。あらかじめ昨日からHPで告知してたんだけど、分かりにくかつたよね。申し訳ない」

やけにフレンドリーで、なのに好感の持てる接客だった。あたしはそこで初めて、男性店員の顔をまともに見る。見覚えのある顔だった。店員もあたしを見て、ああ、と得心したように言う。

「たこ焼きあげた子だ」

「岡本清」と彼は名乗った。オカモトセイと読むそうだ。

店内奥には、一人掛けのソファが対面するように四脚並べられている。あたしと吉村くんはそこに並んで座った。

やがて、岡本さんがトレイに乗せたカップ二つと、クッキーのよ

うなお菓子を運んできた。「こんな物しか出せないけど」と、丁寧にテーブルに並べていく。

「あー、いえ。こつちこそ閉店なのにお邪魔して……」

無駄に照れるあたし。分かってる、照れてる場合じゃないのは。

岡本さんは、吉村くんの正面側のソファに腰掛ける。カップに入ったお菓子を一本手に取った。細長い、半月状のクッキーだ。

「これはイタリアのお菓子。ビスコッティ。そのままかじってもいいし、コーヒーに浸すとさらに美味しい」

彼の箴言どおり、あたしたちはビスコッティをまずそのままかじった。さくりというよりは、ばきりという固い食感。続いて残り半分をコーヒーに浸して食べる。少しだけ柔らかくなって食べやすい。吉村くんはうなずく。

「僕、初めて食べたよ。美味しいなあ」

「うん、美味しいね」

「二人とも、いい笑顔だね」

若干芝居がかった褒め言葉も、岡本さんが言うようになる。どこか繊細な声色、耳心地の良いテノールボイスだった。それに合わせるかのように、彼の顔は精巧な造りをしていた。長めのまつ毛に優しい瞳、その上では弓形の眉がミリ単位で整えられている。エンジ色のエプロンの下には染み一つない真っ白なワイシャツ。彼は、テーブルの上にそっと、絡めた両手を置いた。

「それで君たちは、静香に何か用があつて来たんだよね」

あたしは、彼の唇が形取るうつすらとした笑みを見た。これほど自然に笑える人がいるのか、と感心する。

この問いには、本来ならあたしが答えるべきだったのだろう。だが、彼の笑みに見とれてしまい、ぼんやりとして何も言えなくなっていた。

頭上から、木製ファンが回る音が聞こえる。しばらくして吉村くんが口を開いた。

「その前に、僕からあなたへ一つ訊きたいことが」

彼の声には、密かな闘志のようなものがたぎっていた。はっとしてあたしは吉村くんの横顔を見る。なんか知らんが、目がもう既に燃えていた。

「今、彼女を呼び捨てにしていました。静香さんとはどういったご関係で？」

「難しい質問だね。どうと言われると、少し悩む」

「悩む？」

「知り合いか、友達か、という意味だね。僕は彼女の外面的なことなら詳しいつもりだけど、プライベートとか、心の中までとなると、ちよつとね」

そして岡本さんは苦笑する。あたしはスカートのポケットに手を入れた。ペンダントの感触を確かめながら、さらなる疑惑を抱く。

吉村くんは眉根に寄せ、少しあいだ考え込むが、やがて満面の笑みを浮かべた。

「そうですね。それならいいんです」

納得したらしい。その言葉さえ聞ければ良いんだという感じで、盲目的に。

吉村くんの隣、窓際には、腰ほどまでの高さしかない本棚がある。本棚にはいくつかの小説が収まっているだけで、その他の多くは解剖学系の学術書か、人相学に関する本ばかりだった。

吉村くんはその中の一冊を手に取る。『人と動物の感情表現』。ダーウィンだ。

「この棚は、やけにジャンルが偏っているみたいですね」ページをめくりながら吉村くんは言う。静香さんについては、一時うやむやになっていた。

岡本さんはにこりと笑って答えた。

「その辺は僕が持ち込んだ本。もとは旅行のお土産やアンティークを飾るための棚だったけれど、本が増えることはお店にとって何よりだからね。好きに蔵書させてもらっている」

「こういったことを勉強されているんですか。それとも趣味？」

「趣味というか、興味かな。大学も建築関係だし、人の顔に興味を持ったのもつい最近、たまたまだよ」

ページをめくる音。あたしは直感的なものを抱いて、やや久しぶりに口を開いた。

「人の顔に興味を持つって、変わった着眼点ですね」

「よく言われる。でも、当たり前のことにふと疑いを持つのが、大抵の知識好奇心の始まりじゃないかな」

岡本さんは、「その本」と、吉村くんの手にあるダーウインの本を指した。吉村くんは聞こえていないみたいに本に目を落とし続ける。岡本さんは言う。

「その本にはデュシエンヌの研究が図解されている。顔の筋肉に電気刺激を送り、文字通りの『つくり笑い』をさせてみせるという、表情の実験。僕はそういった顔の真意に興味がある。さっき言った当たり前のことというのは、つまり『人の表情』について。『表情』は、言語よりずっと原始的な表現だから」

「言語よりずっと原始的な表現？」

あたしには管轄外過ぎて、おうむ返しに訊くことしか出来ない。

「そう。原始的で、国際的で、ほぼ絶対不変の言語。『声』を用いた言語が百種類以上あるのに対して、『顔』は一種類の言語しか持たない。分かりやすいところで言うと、たとえば唇。各国共通で、喜びを表現したければ口角と上部顔面骨をつなぐ笑筋を収縮させればいいし、悲しみの表現なら広頸筋で唇を引き下げればいい。そういう大凡のレパートリーから派生して、人は様々な表情表現を行う。人の顔に張り巡らされた神経とその使われ方については、現代の解剖学でも解明しきれないという話だよ。それだけ、複雑で豊かな表現が可能なんだ。言葉と同じように、表情も立派な人間的文化だ」

そして、沈黙が空気に落ちくぼむ。あたしは彼の語りをゆっくりと咀嚼する。

岡本さんの浮かべる、疑いがたいほど自然に繕われた笑みの由縁

を知った気がした。

「すると岡本さんは、言葉の勉強をしているようなものですね」

「おもしろいことを言うね」彼は感心して目を細めた。「確かにそうかもしれない。言葉と、それに付随する文化的表現は他の動物には真似できないことだ。人は言葉で嘘を吐く。同じように、表情でも嘘を吐ける。先天的に、あるいは訓練次第でいくらでも」

吉村くんが本から顔をあげ、あたしの神妙な顔つきを可笑しそうにのぞき見た。

「そうになると咲子さんって、言葉も表情も表現不自由だよね」

「うっさいわね」

自分がひどく文化的に遅れた人間のような気がしてきた。英会話ならぬ顔会話スクールってあるのかしら。たぶん無いな。

人は表情でも嘘を吐く。

岡本さんはそう語る。ならば恐らく、彼は表情で嘘を吐くことを知っているのだろう。

「二点ほど、岡本さんに尋ねたいことがあります」

「どうぞ」

あたしはポケットから、『SHIZUKA』の刻印が入ったペンダントを取り出す。音もなく、テーブルに置いた。吉村くんは目を丸くしてそれに見入った。

「これ、岡本さんのですよね」

あたしは、彼の作る、ほぼ百点満点の喫驚を見つめた。この場では誤魔化し笑いではなく、驚きが正解であった。ペンダントを手に取り、裏の刻印を確認して深々とうなずいた。

「確かに僕のペンダントだ。どこで拾ったのかな」

「森林公園の、ミニモアイ広場です」

「そうか、なるほど。あそこは猫の広場みたいなものだ。道に落ちただけなのに、どうして見つからないのかと困っていたけど、どうやら野良猫がくわえていったらしいね」

岡本さんは安堵の息を吐き、頬を弛緩させる。

「ありがとう。また何かお礼をしないとね」

真つ先にたこ焼きが頭に浮かぶ。あたしが発言しようとしたところで、吉村くんが静かな怒気を込めて口を挟んだ。

「そのペンダント、静香さんと深い関係はないと思っただけですけど。こちらの勘違いだったかな」

覚悟していたことだが、やはり邪魔な野郎である。一気に空気が悪くなるが、岡本さんは意に介さず、あくまでにこやかに対応した。「もしかすると吉村くんは、僕と静香の交際関係を疑っているのかな」

「率直に言えばそうなりますね」

「さらに率直に言えば、静香に惚れている？」

吉村くんは一片の迷いもなくうなずく。無駄に一途なのが彼の長所であり、欠点だった。

「だったら安心してくれ。僕と静香は恋人同士じゃない。けれど、このペンダントについて説明するのは、すごく難しいな。買おうと言い出したのは彼女の方からだったけど、恋心とか、そういうものとはかけ離れている。それは確かだよ。彼女を口説きたいならいくらでも口説けばいい。こんな説明で理解してもらえとは到底思えないけど、一応の弁解として」

飲み込みきれない顔で、吉村くんは黙り込んだ。あたしはせき払いを一つして、岡本さんの注意を向けさせる。

「もう一つの質問は、その静香さんについてなんですけど」

岡本さんはペンダントのチェーンを首に回しながら、無言の笑みで話を促す。

「彼女、本当は　もしこれが間違っていたら、すごく失礼で、不謹慎な問いになってしまうのだろう。「目、見えているんじゃないんですか？」

岡本さんの頬が、一瞬、ぴくりと緊張する。少しでも目を逸らしていれば気づかないほど、かなり小さな変化だった。

「日野さんは、まだ一度しか静香に会ってないよね」

「はい」あたしは努めて不遜に肯定する。

「今度彼女に会ってみるといい。セツティングは僕がしてあげる。その質問は、彼女と直接顔を合わせてからが適切じゃないかな」

あたしは首肯する。セツティングとは、多分あたしと静香さんの一対一でということだろう。

岡本さんはあたしの予定を確認する。あたしはなるべく近いうちに静香さんに会うつもりだった。

吉村くんはもう、あたしらの会話には割り込んでこない。むっつりした不満げ顔で、窓の外の暮れ始めた太陽に目を向けている。あたしは思い出したように、吉村くんに「ごめんね」と言ってみるのだが、やはり彼は何も言わなかった。

「あの岡本清おかもとせいって男、どうも気に食わないね」

ブックカフェ・カワシマ・ギャラリーを出たあと、吉村くんが漏らしたのは岡本さんへの不信感だった。吉村くんが口を利いたのは、ブックカフェを出てから実に二十分ぶりである。あたしをシカトし続ける彼をサーティワンに引っ張り込み、無理矢理アイスを奢ることで半強制的に口を開かせたのだ。

しかし、開口一番がこの愚痴である。あたしにも否があるとはいえ、いい加減うんざりだ。

「なんで？ 吉村くんが勝手に対抗意識燃やしてるだけでしょうに」  
「僕はそういうことを言いたいんじゃない」

彼は苛立たしげにアイスに噛みつく。ハロウィン期間限定のパンブキンソーダ味。

「咲子さんは徹頭徹尾、あの素敵笑顔に騙されていたみたいだけど。あんなの、どこまでいったって作り物さ」

「そんなもんかね」少なくともあたしはあんな風に笑えない。

「そうだよ。彼の言うデュシエンヌの実験と同じ。電気刺激か、脳からの命令か、それだけの違いだ。所詮は研究や訓練の域を出ない

じゃないか。笑いたいときに笑う、それが純然たる人間らしい文化的表現つてもんだらう」

あたしが合いの手を入れる間もなく、吉村くんは「気に食わないといえば、咲子さんもそうだよ」と言う。

「何を考えてるのか知らないけど、いまさら、僕と咲子さんの間で隠し事なんてさあ……」

それ以上は口を噤み、彼はアイスを食べることに没頭した。ブツクカフェでの吉村くんは、岡本さんと静香さんの関係に釈然としないう様子だったが、それを言ってしまうえば、あたしと吉村くんの仲だつて言葉にし難いだろう。

いつだったかは忘れたが、吉村くんはある人に対して「僕にとつて、咲子さんは痒いところに手が届くような存在」と紹介していた。なるほどとは思うが、それだつて完全適切であるとは言えない。

あたしと吉村くんが隠し事なんて、本当にいまさらだ。今の吉村くんは思考停止に陥っている。そもそも『恋人』や『友達』などという、誰かが規定したような固定の枠組みで考えること自体が彼らしくなくて、いつもの吉村くんなら「人の数だけ思惑があり、それぞれの人間関係がある」なんて偉そうに言いそうなものなのに。

「ごめんつてば、吉村くん」

まあ、振り回したあたしのせいなんだろうな。そつぽを向く吉村くんに、あたしはもう声をかけなかった。



## 六話

ばちん、という気分を削がれるような音がして、髪留めのゴムが切れてしまった。

早朝、HR直前の女子トイレ。洗面台の前、あたしは物凄く気だるい思いで、だらしなく垂れていく髪の毛先を眺めていた。人差し指と親指で、切れた茶色のゴムをぶら下げる。あーあ、どうすんだよこれ。

普段から、こうして地味なゴムで髪を一束ねにし、サイドテール風に胸の前に流していた。なんといっても楽だし、目立たないからだ。あたしくらいの長さで楽な髪型といえばツインテールだが、いかにもアホ丸出っして感じだし、そもそも目立たないという観点から却下される。かといっておさげは柄じゃない。似たような理由でポニーも除外。高校デビューとか、もう知らん。

となるとサイドしかないわけだが、これがどうしたもののか。替えのゴムがない。

すると、あたしの手元に水色の派手なシュシュが差し出された。顔を上げると、真由が立っていた。

「これ使う？ 咲子さん」

「あんた、いつの間に復活したんだね」

シュシュを受け取りながら言うと、真由は屈託なく笑って両手を腰に当てた。

「マユ、もう落ち込むの止めた。これからは咲子さんみたいに前向きにタコヤキのこと捜す。捜査だよ、捜査」

「捜査って、また大袈裟な」

「だって、あのとときの咲子さん、探偵とか刑事みたいだったよ。公園のときのあれ。サツてなって、シュバツ、みたいな」

どうでもいいわ、と思いながら、しかし今渡されたシュシュは問題だった。目立たないを追求するあたしにとって、これはどうだろ

う。

「マユ、咲子さんの助手になる」

「また訳わかんないこと言う。ねえ、もっと地味なやつない？」

「それしかないよ。ねえいいでしょ？　だって咲子さん頭いいし、絶対そのうちタコヤキ見つけてくれるよ。マユ、そのお手伝いしたい。それで、犯人見つけたらぶつとばしてやるんだ」

と、真由は虚空に敵を作り、鈍いフットワークとのろすぎるパンチを披露した。まったく頼りにならなさそう。それは構わないが、真由が元気を取り戻してくれたようで良かった。

あたしは思う。岡本さんが静香さんが犯人と仮定すれば、ミニモアイ広場で発見した動物の惨殺体は、たぶんタコヤキじゃない。縁日の日、静香さんの「彼も私もたこ焼きが大好きなんです」という発言と、バンドナ店員と吉村さんの「視覚障害の女性の膝にたこ焼きみたいな猫が乗っていた」という証言を踏まえてあたしは想像している。だが、これはあくまで想像の域を出ない。

「タコヤキ、そろそろ戻ってくると思うよ」

「ほんと？」

あたしはうなずく。割と確信的に。

「そういう気がするってだけ」

もう仕方ないと割り切り、髪をシュシュに通した。やっぱり派手だった。鏡を見ると、後ろで真由が感極まって目をうるうるさせ出したので、いよいよ面倒くさくなってきたやがったなと思ったあたしは、「おら、HR始まるよ」と、一目散に女子トイレをあとにした。

今日も部活をサボった。堤くんの恨み言を聞くのはもう散々だし、真由がついてくるとまたやりにくいので、今回は無断で堂々とサボる。

小走りで教室を去っていくが、運良く真由は気づかなかった。あたしのこと手伝いたいとか言ってたから、ちよっと申し訳ないと思

う。

裏門を抜ける。そこから数分歩くと、そこには目印のコンビニ駐  
車場がある。岡本さんの車はそこで待っていた。

「早かったね。もしかして急がせた？」

助手席のドアを開くと、岡本さんがそう言った。

「おもつきし部活ばつくれたんですけどね。でも気にしないでくだ  
さい」

「うん。一日くらいなら罰は当たらない」

たしかに一日だけなら当たらなさそうだけど。フレッシュ過ぎる  
その笑顔をまともに見ることもできず、あたしは無愛想に助手席に  
座った。

「その髪留め、似合うね」

また余計なお世辞を。

岡本さんはあたしを『カワシマ・ギャラリー』へと案内すると、  
業務員室の扉を開けてどこかへ行ってしまった。通常通りシフトが  
入っているのだという。

がらん、と古くさい鐘の音を立てながら店内に入る。数日前と違  
い、客がそこそこ入っていることに気づく。窓際にすらりと伸びる  
カウンターに等間隔で並び、それぞれがコーヒーや読書を嗜んでい  
る。その多くは老人や主婦、背広の似合う壮年の男性といった感じ  
だった。カウンターを横切り、奥へと進む。壁側の棚に陳列された  
本の背文字を流し見ながら。

最奥のソファには女性が一人、すでに座って待っていた。この前  
あたしと吉村くんが座った場所だった。

彼女のテーブルには、ホットココアが湯気を立てながら整然と置  
かれている。口をつけた様子は見受けられない。膝の上には、白と  
茶色の毛皮の塊が丸まった状態で乗っていた。彼女は姿勢をただし、  
柔らかかそうな毛皮の上に両手を添えている。ソファの端には、縮め

られた白杖が立てかけられている。

あたしは視力に自信のある方じゃないが、その毛皮の塊はどう見ても猫だった。猫は機能性の悪いヘルメットでも被っているみたいな茶色い頭で、背中の一部も、同じような円型の茶毛に覆われている。それ以外は純白の毛並み。

みんな口を揃えてあの猫のことを「たこ焼き」みたいだと言うが、あたしには今一つピンとこない。こじつけた。下手くそなミス터리サークルにしか見えない。だが、あれが真由のタコヤキだということは間違いなさそう。記憶と照らし合わせて、彼女が静香さんだということもほぼ確定だった。

ソファ席に近づく。静香さんは目を閉じたままだった。あたしの登場など気づきもしないように顔を前へと向けている。

向かいのソファに腰を下ろす。

「んーにゃ」

これはあたしじゃない。もちろん静香さんでもない。一番に挨拶をしたのはタコヤキだった。「よう日野咲子」みたいな、ふてぶてしい感じで。

「日野です。先日の縁日ではどうもお世話になりました」

なんか営業マンみたいだなあたし。

「こちらこそ、あのときは助かりました」と、静香さんは軽く会釈をする。「日野さん、学生さんでしたよね。とても大人びています」

あんたの落ち着きようには敵わないけどな、と思う。静香さんはホットココアを傾けた。テーブルの上にはミニバスケットが乗っついていて、コーヒー牛乳飴が入っている。ひとつ手に取り、口に入れてみた。

三分ほどで舐め尽くしてあたしは口を開く。

「実は今、学校でバリアフリーをテーマにレポートを作成しているんですけど、中々うまくいなくて。そのおり偶然、吉村くんからとても親しみやすい女性だと紹介されまして、まあそのついで岡本さんと知り合ってますね。それで、あー、えっと……」

なんか駄目だ。嘘つてのはどうしても文脈がばらついてしまう。あわてて継ぎ句を考え出したところで静香さんから助け船を受ける。「大丈夫ですよ。お話は岡本さんから伺っています。私でよければ、何でも聞いてください」

あたしはかなり恐縮しながら、「じゃあ失礼して」と鞆からメモ帳とペンを取り出した。これはあたしが悪いんだけど、こうまで品行方正な人を前にすれば緊張せずにはいらなかった。

事前に用意しておいた彼女の受ける福祉に関する質問に、彼女は表情を崩さず、質問のネタが尽きるまで淀みなく答えてくれた。

表情を崩さず、といっても常に笑みを保っていたわけではない。あたしの真摯を装った質問に対し真剣な顔を作ることあれば、ときおり挟む冗談に愛想笑う。質問の意図が読み取れなければ首を傾げ、少し困ったようにする。そして最も奇妙なのが、あたしが何気なくふつと笑いかけてみせると、彼女も同じように微笑み返してくれるのだ。不思議に思う。果たして目の見えない人間に、このような視覚を用いたコミュニケーションが取れるだろうか。

「質問は以上でしょうか」

「ええ、大体こんな感じで」

メモ帳とペンを鞆に仕舞う。

「ここからはかなり個人的な質問、というか相談になってしまっんですけど」

「どうぞ」

慎重に言葉を選び、なるべく間接的な方法を取ることにする。

「あたし、笑顔ってやつが苦手で、兄貴からもよく無愛想で可愛くないって言われるんです。そのせいか分からないけど、会話もほとんど下手くそで、吉村くんからもしょっちゅうからかわれるし。だから、いっつも人を避けてしまっんです。でも不思議なのが、静香さんを前にすると、こんなあたしでも楽でいられるっていうか。静香さんの自然で飾らない笑顔がそうさせるのか何なのか、うまく説明できないんですけど」

しばらくの沈黙のあと、タコヤキが「なーご」と鳴く。静香さんはタコヤキの頭を撫でて大人しくさせる。

「私の表情が自然であるかどうかは、この通り私自身には判断しかねるところですけど、日野さんがそうおっしゃるのなら私は表情作りに成功しているということですね」

すると、静香さんは窓の方へと顔を向けた。照りつける西日が睫毛に落ちる。彼女の眉根は動かない。眩しさを感じないためか、それとも、そういう演技か。

「外は晴れていますか？」

肯定を意味してうなづく。それだけでは伝わらないだろうかと一応の危惧をし、「晴れてますよ。雲ひとつない」と付け加えた。

「このお話は、お散歩しながらにしませんか。私、外の空気が吸いたいです」

あたしはソファを立つて静香さんのそばに近寄った。静香さんは折りたたみ式の白杖をショルダーバッグに入れ、すっと立ち上がり、タコヤキを片手にあたしの二の腕を掴んだ。その一連の動作は非常にシステマティックで、まるでこちらの立ち姿勢まで把握しているかのようにだった。ますます分からない。

「猫、持ちますよ」

「そうしていただけると助かります」

あたしはタコヤキを預かった。静香さんはあたしの腕をつかむことに専念する。

彼女を斜め後ろにたずさえ、カウンター際を慎重に進んでいく。レジカウンターでは、岡本さんが戸棚やアンティークを拭くことに没頭していた。

「岡本さん。私たち、これからお外に出てきます」

「うん。あまり遅くならないようにね。もし僕の終業時間を過ぎるようだったら、そのときは携帯に連絡して」

「はい、なるだけ早く」

あたしたちはカフェを出た。

うるさくない場所がいいだろうと思い、人見川周辺を目指すことにした。住宅街を抜け、五分も歩くと人見川沿いの道に入る。海まで数キロほど伸びる遊歩道だ。途中には市立図書館や総合病院があり、逆の山側の終点にはゴミ廃棄場がある。あたしたちは海側を目指すことにした。

日が落ち始めている。河原で野球に興じる少年たちを横切ると、環境音は川のせせらぎのみとなる。近所の学校の制服を着た女子高生が自転車であたしたちを追い越していった。奇妙なハーフアップの髪型をしたその後ろ姿を眺めていると、静香さんが口を開いた。

「日野さんは、鏡で表情の練習をしたりしますか？」

思い返してみるのが、そういった経験は一度たりともない。

「ないっすね」

「それがいいです。表情を培うには他者を交えてが一番だと思います。他者を介しない表情に意味はありませんから。対人としての表情は、相手にアクセスして初めて生まれるものです」

「アクセス？」

「そう、アクセス。相手と打ち解けたい、理解したいがための好意です。アクセスの第一歩は相手の顔を見ることじゃないでしょうか。さつき、日野さんも私にアクセスしてくれましたよね」

「そうですね。すみません、なんかまじまじと見ちゃったみたいで、皮肉に聞こえてしまったらどうか。だけど、それでもいいと思う。目の見えない人間が、『見られている』と感ずることが出来るだろうか。常識的に考えれば違和感を拭えない。

「皆さん、私の顔をよく観察されていきます。心理学的なことは分かりませんが、たぶんみんな、見つめ返されないことに安心するんじゃないでしょうか。だから遠慮なく、私の顔の動きを観察できる。私は、絵の中の人間と同じようなものですから」

「なんかそういうのって、平等じゃないですね」

「でも私は、自分が盲目で得をしていると思っと思っていますよ。人と話すの、結構好きなんです。大抵の方はそうだと思います。見えない分、私たちは声や音を娯楽とするしかありません。気軽にアクセスしてもらえることは、言い換えれば相手と仲良くなるチャンスです。私さえ愛想よくしていれば、すぐにお友達」

それでも盲目者にとっては不平等だ、とあたしは思う。一方的というか、彼らばかりが常に受け身になってしまう。アクセスされやすいかもしれないが、彼らからはアクセスできない。彼女は「それでも」と続けた。

「それでも不平等があるとしたら、私には、『微笑み返される』というのが、生涯あり得ないということでしょうか」

清閑な遊歩道では、声はよく透き通って聞こえる。

「もう、慣れちゃいましたけど」

男の子が川に向かって石を投げている。子供といっても中学生くらいだろうか。あたしは横目にその様を見ていた。静香さんの顔を無遠慮に見ることも、今だけは気が引けた。

「失礼なことを訊くかもしれませんが、」一端の間を置いてあたしは続ける。「目が見えなくなったのって、少なくとも、生まれつきじゃないんですよね」

ちらりと見ると、彼女は小さく首を傾げていた。

「どうして、そう思われるのかしら」

「なんとなくです。鏡で表情の練習、顔を見ることで他者にアクセスする、絵の中の人間、微笑み返される。こういう発想って、視覚情報を実体験として知っていなければ出てこないんじゃないかなって。単に知識として語っているなら別ですけど」

「日野さんって、なんだかドラマに出てくる刑事さんみたいですね。今朝真由にも言われたな、そんなこと。」

タコヤキを胸に抱き直す。「ふぎゅ」と鳴く。さらに追求しようとするが、あたしは唾を飲んで押し黙った。静香さんが、薄く、両の頬を開いていたからだった。



白く濁った両眼。顔はこちらを向いているのに、瞳はあたしではなく、見当外れな方を向いている。あたしはその瞳から目が離せない。水晶体は濁んだように透明に淡く白み、お世辞にもきれいとは言えない。もつと酷い言い方をすれば、どこか人間らしくない、冷たい色合いだと思った。

「十五歳で、左目に白内障を患いました。診断されてすぐ、対処する間もなく左目の視力は完全に失われ、それから一年と時を置かず、同じようなことが右目にも起こりました。手術を受けながら学校に通い続けましたが、格好わるい分厚い眼鏡を掛けなければいけません。右目が完全に見えなくなったのは、高校二年生の中期です。一番ショックだったのは目が見えなくなることじゃなく、普通の学校に通えなくなったことでしたな」

「あの、」口ごもる。何も言えない。

「日野さんほど勘のはたらく方からは、たまに訊かれることです。もつと踏み込んで訊かれる方もいます。後天性か先天性か以前に、本当は今でも見えているんじゃないか、って」

胸を直接突き刺すような言葉だった。

「確かに私は、見ることでしか得られない視覚の世界に、未だ取り憑かれたままなのかもしれませんね」

寂しくそう言うと、彼女はふたたび瞼を閉じた。

市立図書館が見えてくる。あたしは、とても信じられない思いでいっぱいだった。この笑みに裏付けされた根拠が理解しきれない。

『見られている』ことをつぶさに感じ取り、こちらが笑えば、彼女は繊細に作られた微笑みを返すことができる。たとえ物音や気配で察していたとしても、どうしてここまで精巧なコミュニケーションが取れる？

「髪、触っていいですか？」

あたしは困惑しながらも、どうぞ、と小さく言う。静香さんの手があたしの髪に触れる。サイドに束ねた毛先をなぞるように上を持って行くと、やがて、真由にもらった水色のシュシュに到達する。

静香さんは慈しむようにシュシュを撫で、手触りをよく確かめた。

「髪、やつぱり結われていたんですね」

「長いんで」

「可愛い髪留めです。日野さんの雰囲気だと落ち着いた色の髪留めを使っていそうですけど、どうでしょう。当たりですか？」

あたしは無言で首を振った。今度こそ純粹に不親切だと思い、声にしてみた。

「外れです」

市立図書館を通り過ぎようとしたところで、ふいに静香さんが足を止めた。あごを軽くあげ、図書館へと顔を向けた。それこそ目で確認するかのように。

「図書館ですよね、ここ」

「ええ」

「ちよつと寄っていきませんか。点字で打たれた本でもあれば、借りていきたいです」

ポケットから牛乳寒天飴を出して口に放り込み、彼女を連れて図書館へと入った。

## 七話

図書館前広場のベンチに座り、タコヤキを撫で回しながら静香さんを待つ。およそ二十分ほどして、静香さんは職員さんに連れられて戻ってきた。彼女は紙袋を手にしている。いくらか欲しい本を借りられたのだろう。

あたしの隣に静香さんを座らせると、職員さんは笑顔で頭を下げ、館内へと帰っていった。

静香さんは上機嫌そうだった。点字本の入った紙袋をお腹に抱きかかえ、顔を小さくうつむかせている。口元には満足そうな笑みがあつた。

「笑顔の素敵な方でした」

さっきの職員のことだろう。

「たしかに素敵な笑顔でした。そういうの、やっぱり分かるんですね。不思議だなあ」

「分かりますよ。楽しかったり、嬉しかったり、そういう好意的な感情の発露って、目で見なくたって伝わってくるものなんです」

「何なんですかね、それ。第六感ってやつ？」

「それもあります」

そして静香さんは笑みを向けてくる。やはり、あたしの声のする方角を察しているのだろう。おおよその検討をつけて微笑みかけてくるのだ。

「でも、もっと具体的な感情の音を耳にすることができます」

「具体的な、感情の音」

「そう。楽しかったり嬉しかったりすると、喉の奥や唇の端に、泡ぶくが立つんです。泡ぶくと言っても、『ぽこぽこ』なんて可愛らしい音じゃなくて、『くちやくちやくちやく』、みたいな音です。体内の肉と肉とが、面白おかしく互いを叩き合うんです。人が前向きになる瞬間って、そういうものなんです」

余計抽象的になった気がするが、全く分からないこともない。人間はもとより楽しかったり嬉しかったりすると、大抵は騒がしくなるものだ。泡ぶくというのはよく分からない表現だがともかく、彼女たちにとっても、それらの感情は声や音として聞き取りやすいのだろう。

「じゃあ、ネガティブな音は聞き取りにくい？」

静香さんは深くうなづく。そうなのだ、と強く肯定するように。

「そのとおり。私たちは、少なくとも私は、悲しみや落胆を読みとるのがすごく苦手です。というか、沈黙が苦手なんです。声や音のない世界は、問答無用で盲目者を置き去りにします。悲しみや落胆についていけなければ、その分、私たちの対処は遅れます。やがて取り返しのつかないことになってしまう」

「それは、どういうことですかね」

「悲しみ、落ち込んでいる人をそのまま放っておけば、どうなります？」

なんとなく分かってきた気がする。静香さんは続けて言う。

「いずれ耐えられなくなり、泣き出してしまうかもしれない。私が無関心であると勘違いし、その人は絶望し、悲しみが決壊してしまふ。私が気づいてあげられないばかりに」

「でもそれって、目の不自由な人たちが負う責任にはならないと思いますけど」

あたしはぽつりと反論してみた。返ってきたのは、沈黙だった。

静香さんは何故か、そこで口を閉ざしてしまった。じつと、前方へと顔を向けている。あたしもつられてそちらを見る。

そこには、さきほど自転車であたしたちを追い越していった女子高生がいた。頭頂で結われた、果物のヘタのような奇抜な髪型が風に揺れていた。図書館での用事を終えたのだろう。これから帰るところらしい。自転車にまたがり、ペダルに足をかけている。あたしたちのそばで動きを止め、こちらに視線を送っていた。

彼女の顔に表情はなかった。無表情が自分の自然体なのだとても

いうように。しかし、そこに感情が無いわけではない。あたしはそう捉えた。目を見ればわかる。何かあたしに言葉をかけようと、迷っているように見えた。

表情がなければ、それは感情のないことと同義なのか。そんな疑問が頭をつく。たとえば、顔の筋肉や顔面神経が機能しなくなった人間がいるとする。当然彼らに自由な表情表現を行うことはできない。だが、彼らの持つ障害はそれだけで、なにも感情までが搾取されたわけではないんじゃないか。表情がなくなるとも、胸のうちに熱い感情を秘めているかもしれない。

目の前にいるあの女子高生に表情がないとしても、必ずしも彼女が冷めた人間だとは限らない。沈黙の中、あたしはむしろ彼女に好感さえ抱いていた。

「どうしたの？」と、声をかけてみる。

その女子高生は唇を開いた。小ぶりな口を、ぽかん、と開けた。やはり、あたしに何か伝えたいようだ。けどなかなか言葉にはならない。しばらくして、「ねこ」と彼女は短く言う。

「猫？」

「ねこ、よだれ垂らしてます」

それを最後に、彼女はペダルに足をかけ、逃げるように図書館前広場を去っていった。

見下ろすと、あたしの制服のスカートは、臭い液体でぐしょぐしょになっていた。言うまでないことだが、タコヤキの涎だった。猫つて、涎垂らすんだな。

長考した結果、あたしはタコヤキを許してやることにした。熟睡しているようだったので、ハンカチをそっと頭のした敷き、枕にしてあげた。

静香さんが声を発したのは、そんなときだった。

「無償の善意というのは、ああいう風に、時として表情を伴いません。あの子はきつと、本来の意味での善意を持っているのでしよう。表情なんて、詰まるところお飾りなんです」

タコヤキの頭を撫でながらあたしは押し黙る。

「人は欲深い生き物ですから、普通は、善行のあとには必ず見返りを求めます。好意が欲しいがために笑みを向ける。そんな欲深い相手と、それでも友好関係を結ばなければなりません。とすれば好意を向けられた場合、こちらと同じものを返す必要があります。微笑みを受ければ、こちらも微笑みを返さなければいけない。たとえ目が見えなくても、微笑まれたという実感が得られなくても」  
あたしは首を振った。

「やっぱり、不平等だ」

「それでいいですよ、日野さん。いくら私が強がってみせたって、持たざる者はそれだけで代償を払うものです。みんな、当たり前のことから目を逸らし過ぎます。障害者は、持たざる者なんです」  
笑顔とはそういうものだっただろうか。損得勘定の笑みに、いたい何の意味があるんだろう。

「仕方がないんです。私の笑みはただの仮面でしかない。はつきり言って、人と話して心の底から楽しいと思えたことなんて、これまでで数えるほどしかありません。本当の私は、とてもいやらしく、卑屈で、すごく惨めな人間なんです」

唐突に、静香さんはセーターの袖をまくった。手首には無数のミズ腫れが走っている。うっすらと赤みを帯び、皮膚の下に黒く凝固した血の塊を見る。あたしの印象に間違いがなければ、それは自傷の跡だった。

「私はあなたのような健常者を羨んでいます。妬んでいます。人の顔をじろじろと無遠慮に観察して、無遠慮な好意を投げかける。どれだけ私が苦労して、どれだけ苦しんで、この笑みを演じているのか知りもしない。そんなあなた方の配慮の無さを、身勝手ながら、恨んでさえいます」

さらによく見せようと、手首をこちらに差し出してくる。耐えられなくなつて、あたしは彼女の手首をつかみ、押し戻した。

「もう、やめましよう。なんであたしなんかに、こんな話を……」

泣きたくなるのと同時に、おかしかった。無闇に静香さんの中に踏み込もうとした自分の口から、そんな無責任な台詞が出るなんて「聞いてください、日野さん。私が今から告げることが、あなただけに聞いてほしいんです。今日お話してみれば、日野さんなら安心して話せると確信しました。あなたなら、いつかきつと分かってくれるはずです」

あたしは押し戻す手を止め、静香さんの顔を見返した。無感情とは、こういう表情のことを言うのだろうと思った。

「私は、もうすぐ殺されます」

そよぐように吹いていた風が止み、無音があたりを包んだ。それは彼女の言葉に呼応するかのような変化だった。無音はどこまでも空気を凍らせた。

「誰に？」

「彼に。彼女にです」

自分の心臓の音がよく聞こえる。彼に。彼女に。

「こんな私がこれまで生きてこれたのも、彼／彼女のおかげでした。彼／彼女は、具体的な部分で私と似通っています。とても具体的な部分で共通し、繋がっていた。そして、私たちはもつと深く繋がることを望みました。その方法を、ようやく思いついた」

あたしは何も言えなかった。

「考えなくてもいざれ分かります。彼／彼女は、さらに具体的な方法で私と繋がるつもりです。私は甘んじてそれを受けます。ただ、このことを誰かに知っておいてほしかった。できれば事後、あなたにも理解してほしい。世界にたった一人でもいいから、彼／彼女を理解し、許してあげられる存在がほしかった。それだけなんです」

そして、静香さんはセーターの袖を戻した。すっぽりと隠れていく手首を見送りながら、あたしは頭を巡らせる。彼／彼女。具体的な繋がり。具体的な方法。どれ一つ取っても意味が汲み取れない。

それらは、考えなくてもいざれ分かるという。だが、それではないような気がした。今考えておかなければならないと思った。

手遅れになる前に答えに辿り着かなければいけない。でなければたぶん、あたしは後悔する。

「帰りましょう」

静香さんは立ち上がり、両手を開いた。肘の関節部に紙袋がぶらさがる。彼女の仕草は、なにかを抱き抱えようとするようなだった。あたしはひどく迷い、やがて、タコヤキを彼女に手渡した。

翌日の朝。

予告通り、静香さんとはあるラブホテル内の一室で、遺体となつて発見される。



## 八話

十月十二日の夜。

町田市のとあるラブホテル内で発見された死体の身元確認は速やかだった。ホテル従業員が清掃のために入室し、死体を発見した直後、すぐに警察に届けたのだという。

そして今朝、テレビのニュース番組はその被害者を、『丘本静香』と報道した。

年齢は二十二歳。世田谷区の住居に一人暮らし。生活支援を受けながら、ときおり各地の中学校で社会人講師の活動をしている。その他には議事録のためのテープ起こしや、ホームページ掲載用文章の作成など、様々な事務アルバイトで生計を立てていた。

ホテルの監視カメラには、静香さんを連れて通路を歩く、犯人とおぼしき人物が写っていた。画質が悪く、顔はよく分からないが、背格好だけならかうじて判別できる。

身長は170cm前後。灰色のブルゾンに紺のスラックスを着用している。フードを被っていたため髪型は分からない。犯人はおそらく男性だと考えられていた。

目が見えないのをいいことに、犯人は言葉巧みに被害者を騙し、暴行目的でホテルに連れ込んだのではないかと警察は述べた。

映画俳優出身のコメンテーターは言う。

「身体機能に難のある、とくにこうした視覚障害者を狙った殺傷事件は今に始まったことじゃありませんが、われわれ健眼者にとつては非常に嘆かわしいことです。最近は障害者雇用や支援ばかりに目が向けられています。私が思うのは、こういった暴力事件の対策として弱者を守るために常日頃からもっと防犯意識を浸透させなければなりません。しかし、それにしてもこの犯人は――」

冗長かつまとまりの無いコメントだったが、彼が最終的に言いたいのはつまり「障害者の弱みにつけ込むなんて、この犯人はなんと

卑劣で非人道的なのだろう」ということだった。

しばらく、吉村くんとの交流はぶつとりと途絶えた。会話どころか、挨拶すら交わした記憶もない。もともと吉村くんからの呼び出しさえなければ、袖も振り合わない縁遠い関係だった。たまに廊下ですれ違ってくるくらいで、目も合わなかったと思う。

吉村くんは、静香さんの突然死をどう受け止めているだろう。いくら考えてみても無駄だった。顔も合わせない今、あたしが真の意味で彼の心を知ることにはなかった。

「咲子、お前今日はいつにも増して暗いな」

そして兄貴はテレビへと視線を戻した。

「そんなに暴漢魔が恐いなら、しばらく送り迎えしてやろうか」

幼児に向けるような腹の立つ言い方だったので、あたしは無視した。

カップを持ち上げる。コーヒーの跡が、食卓に丸い曲線として描かれた。食卓には白いクロスが敷かれていたので、カップの底跡は余計くつきりと残された。あたしにはそれが、人間の目玉のように見えた。

コーヒーを飲み干す。もとの場所にカップを戻して、目玉を覆い隠した。

「障害者って、弱者なのかな」

あたしの問いかけに、兄貴は無言で煙草に火を点けた。じつくり考え込むとき、兄貴はいつも煙草を吸う。すーっと音を立て、開け放った窓へと煙を吐いた。

「どういう意味での弱者か知らんけど、身体的な意味でなら、間違いない弱者だろ」

「たとえば目が見えないとして、それ以外の能力が人より発達していても？」

「それでも大した能力になりやしねえだろ。立場が覆るわけでもな

い。咲子がいくら柔道習ってたからって、女のお前が俺に腕相撲で勝てんのか？」

あたしは食器を重ねて床に降ろした。パジャマの袖を二の腕まで捲りあげ、食卓にどんと肘をつく。兄貴は煙草を灰皿に押しつけて、あたしの挑戦に応じた。

開始の合図もなく、腕相撲は始まる。兄貴は、兄貴のくせに強かった。

開始直後、こりゃ負けるなと判断したあたしは、大口を開け、思いつきり兄貴の親指に噛みついてやった。おでこ引っ叩かれた。

「やっぱアホだろお前」

「柔道だったら勝ってたわ」

「柔道だったらな」

兄貴は親指を寝間着に擦りつけながら、リビングを出ていった。

件の事件が報道されて数日と経たないうちに、容疑者の実名が世間に出回った。そんな日のことだった。

文芸部の部室でいそいそと作業をしていると、吉村くんから電話がかかってきた。ノートに猫の落書きをしていた真由が、弾かれるように顔を上げる。長机の上、突如として鳴動するあたしの携帯電話に、堤くんは露骨に顔をしかめる。いたたまれなくなって、あたしは携帯を手に部室を飛び出した。

『部活が終わったら、真由ちゃんを連れて僕のマンションに来なよ』  
吉村くんの第一声がそれだった。久しぶりに連絡よこしてきたと思っただらこれだ。

「部活だって分かってんなら、電話しないでくれるかな」  
サイレントモードにしなかったあたしも悪いけど。

「で、なんであたしら、吉村くんのところ行かなきゃなんないの。あたしさ、今は吉村くんのお遊びにつき合えるほど余裕ないのよね。おもに心の方が」

『あのね咲子さん、どうやらそうも言ってらんないみたいだよ。これはお遊びでも冗談でもない』

「そういうのいいから、用件あるならさっさと見え」

『真由ちゃん猫が帰ってきた』

そこで、あたしの注意は部室の扉から、完全に電話口へと移行された。

「ねえ、それって……」

『今日の学校帰りに彼と出会った。出会わされたと言った方がいいかも。静香はもういない、猫は持ち主に返してあげてくれてね。』

彼、岡本清に、いや』

吉村くんは一拍置いて言った。

『彼女、岡本静に』

事件から数日と経たず、警察によって容疑者の第一候補があげられる。

容疑者の岡本静は、普段は『岡本清』という偽名を使い、男性として生活していた。ある日を境に、勤務先の喫茶店に出勤していないことが確認され、自宅のポストにも数日分の新聞が放置されていた。どこか別の場所に身を潜めているのかもしれない。

さらに事件当時の目撃者の証言と、静香さんの交友関係から判断して、犯人は岡本静で間違いないだろうと推測されていた。

この事件に対する世間の関心は、このことで一気に高まっていた。

丘本静香と岡本静。オカモトシズカとオカモトシズカ。

こんな偶然があるだろうか。さらに話題を呼ぶのは、被害者が視覚障害者であり、一方の容疑者は性同一性障害者であるという、その希に見る特殊性だった。

朝のニュースや夕方のワイドショーでは、彼女らについて様々な推論や検証が為された。すると必然、番組の視聴者たちは事件の全

貌にさらに興味を持つ。視聴者の興味はマスコミに伝わり、それを受けたマスコミの熱い要望に、警察もやがて折れた。

愚かなことだと思う。もしこの事件が、常人には理解しがたい猟奇と異常性を秘めたものであったとして、それでも彼らは知りたいと思うのだろうか。知りたいとして、もし知ったとして、彼らに、オカモトシズカを理解できるだろうか。

部活を抜け出し、あたしは真由を連れて電車に乗った。吉村くんの住むマンションはここから二駅となりである。

真由を連れてくるのは大変な苦労を強いられた。まず、彼女はタコヤキの生存をもはや諦めていたのだ。

岡本さんの顔写真が全国ネットで配信された当日の朝、真由が青い顔をして教室に現れたことを思い出す。

「あの人はやっぱり極悪人だったんだ。タコヤキはきつと、もう殺されちゃったにちがいない……」

あたしに慰める権利はなかった。あたしはつい先日、この手で静香さんにタコヤキを返してしまったのだから。

そして今日、吉村くんのもとにタコヤキが戻ってきた。そのことを告げてみたが、真由はかたくなに、猫の落書きから目を離そうとしなかった。

「咲子さん、嘘はいけないよ。そういう嘘は優しさじゃない。タコヤキはもう死んじやったんだ。だってこの前、おじいちゃんと一緒にタコヤキのお墓つくってあげたもん」

なにが『だって』なんだ。しやらくせえ。  
「堤くん。あたしら、今日も部活さぼるわ」

あたしは真由の腕をつかんで、無理矢理立ち上がらせた。真由は色鉛筆を放り投げ、「いやー！」と半狂乱に暴れだした。

堤くんは知らんぷりだった。真由の悲鳴に苛ついていた様子だったが、俺は何も聞こえない、という風に原稿用紙に向かい続けている

た。

「ねえ、ごめんってば」

暴れる真由を抑えつけながら言う。堤くんはため息を吐き、高そうな万年筆（こういうところが文豪気取りなのだ）を叩くように長机に置いた。

「その喧しいの、早くどっか連れていけ！」

堤くんの怒りの叫びに、真由はようやく大人しくなる。あまりの迫力に縮み上がっていた。堤くんは荒い呼吸のまま、乱暴に椅子に腰掛けた。もしかして、こちら側での一番の被害者は、彼だったのだろうか。

そうして今に至る。

電車を降りると、脱力して動こうとしない真由を強引に引っ張って歩いた。

十分も歩くと、吉村くんのマンションに到着する。吉村くんは玄関の前で待っていた。近づいてみて分かったのだが、彼は胸にタコヤキを抱いていた。

それを認めた瞬間、真由の顔色が変わる。目に見えて混乱していた。

「良かったね、真由ちゃん」

真由は吉村くんからタコヤキを受け取った。しかし彼女はなにを勘違いしたのか、タコヤキを守るように抱き締め、敵意をはらんだ睨みを吉村くんに飛ばした。吉村くんは首を傾げたが、やがてそれがどういふ睨みなのか察したように一歩後ずさった。

真由は距離を詰める。わけの分からない叫び声をあげたと思うと、次の瞬間、鋭いタックルを吉村くんにかましていた。

## 九話・彼／彼女の手紙（上）

デスクチェアに腰掛け、タコヤキを膝に抱きながら、手にした一通の封筒をもてあそぶ。

吉村くんは、さつき真由に体当たりされて派手にアスファルトを転がり、肘やら腕やらを子供のように怪我してしまった。我に返った真由はてんやわんやで、もはやその場では收拾がつかなかった。とりあえずあたしらは吉村くんの部屋に入ることにした。

部屋は、あたしが数週間ちよつと目を離れた隙に半ゴミ屋敷となっていた。あくまで半だ。どうにか文化的に生活していける範疇である。

そんな雑然極まりない部屋から救急箱を見つけだすと、真由は押し倒すように吉村くんをソファに座らせ、応急処置を開始した。「大丈夫、大丈夫だから。もう乱暴しないでくれ」という彼の悲痛な叫びは耳に入らないようだった。

応急処置が終わると、真由にチェリオのアイスを食べさせて落着かせた。それでやっと吉村くんは一息つき、真由の隣に深く腰を沈めたのだった。

「まったく……」

あたしは封筒のふちをなぞりながら、騒ぎが落ち着いたことを横目に確認する。疲れた顔の吉村くんと涙目でアイスを食べる真由のツーショットは、なかなか味があつて妙だった。

「お似合いじゃん。付き合えば？」

「誰と誰が？」

「冗談の通じない空気だった。チェアを回転させ、封筒をちらつかせる。」

「で、これが岡本さんの手紙ってことで間違いない？」

「そうだね。猫と一緒に渡してきた。僕はまだ読んでいないけれど、多分岡本さんが書いたもので間違いない」

「猫じゃなくて、タコヤキだよ」真由が口をとんがらせる。「タコヤキ、おいで」

タコヤキはあたしの膝から飛び降り、のっそりとした動きで真由の膝に上っていく。甘やかされた猫なのだろう、よくよく見ると、なるほど体型もたこ焼きだ。

封筒には宛名すら書いていない。口を開けてみると、中には便せんが九枚ほど。普通だったら、すぐ読むという気になれない分量だった。状況が違う。

「どうやら、便せんだけじゃないみたいだよ」

それについてはあたしも、今しがた手のひらに感じたばかりだった。硬質な手触りと重みが封筒に内在している。便せんを取り出してデスクに置き、中身をひっくり返してみる。そこから滑り落ちたものが、あたしの手のひらに落ちた。

二対のペンダントだった。高額そうには見えないが、ペーパーペンダントらしく小洒落た長方形のデザインだ。見覚えがないわけではない。「咲子さん、それなあに？」

真由の疑問には答えず、あたしは吉村くんへと視線を送った。吉村くんは肩をすくめた。

「僕には何のことだかさっぱり」

そうだろうな、と思う。今回は吉村くんさえ仲間はずれだし。

吉村くんが事務的に、「いま読んじやいなよ」という仕草をして、真由に向き直った。

「さて。咲子さん、今は一人になりたいみたいだから、終わるまで僕らはゲームでもしてようか。別の部屋で」

「えー、やだあ。吉村くんはヘンタイだって咲子さん言ってたもんこわあい」真由はもう通常運転だ。

まあまあ、と吉村くんは言っ、二人と一匹は隣の和室へと下がっていった。あたしはチェアを元の位置まで回転させ、デスク上にペンダントを並べて置き、ポケットからいちごみるく飴を出した。

飴を舐めながら、便せんを手を取った。



『日野さん、吉村くんへ。』

突然のお手紙をお許しください。

親でも親戚でも友人でもなく、まず第一に君たち二人へ手紙を宛てようと思ったのは、君たちの奥深い魅力につよく動かされたからでした。

一見して、君たちは意趣返しや磁力のS N極のように対立しあうように見えるが、底の深いところ、芯の部分だけは面白いように惹かれあっているように見えました。人と人においてこの芯というのが曲者で、時として血の繋がりに恋人同士、友人関係といった表面的な繋がりでさえ易々と超越してしまう、一種のシンパサイズ的存在を生み出してしまうことがあります。

もしかしたら君たちにとっては不本意なこともかもしれないけれど、僕は二人の間にそういう共鳴を感じたし、また、僕や静香にも通じるものがあるのだろうと確信したのです。

ですので、君たち二人のためだけに、僕はこの手紙を綴ろうと思っています。

なお、この手紙がどうか君たち以外の人間の手に渡らぬよう、勝手と非常識を承知の上で嘆願させていただきます。

そうは言っても僕は普段、大学の講義でノートを取る以外まともに文章を書く習慣がないので、僕の置かれた現状、それに付随する経緯や心情について、その全てをうまく伝えるためにはいささか筆力が追いつかないかもしれない。しかし、できる限りの努力はしたいと思う。そのため、ここから先は僕なりにやや砕けた文体で綴らせていただきたい。その点はどうかご了承を。

丘本静香の死と僕の素性については、テレビや新聞を通じて君たちも既知のことと思う。たしかに僕は静香を殺したし、そして僕はこ

れまで男性を装ってきた。報道されている内容もおおよそ事実だ。彼らがあれこれと並べ立てる解釈の数々にいちいち訂正を入れるつもりもない。また、そうした主張をする権利が僕にないことも充分わかっている。

それより大事なことを伝えておきたい。というか、君たちに一番知ってほしいのは、僕と静香がこういう結末を選ぶに至った、そのプロセスだと思っから。

まず僕個人の話になるが、いや、思い出すのも楽じゃない。思えば色々あったけれど、最も古い記憶を探ると、僕は初恋の時点からずれていた。

小学校三年生の頃。相手は、集団登下校で一番前を歩くお姉さんだった。僕がこれまで好きになった相手というのは、そのほとんどが年上だった。それも同性の。

とはいえ、その六年生のお姉さんへの恋心もひどく曖昧なもので、好きになること自体がなんだかマズい気がして、なんとなくその気持ちは隠しておくことにした。

当時の僕は、クラスで『女子』にカテゴライズされることを不思議に思っていた。髪を短くしていたし、小学生時代を通してスカートを履いた経験は、多分ない。遊び相手はいつも男の子で、川魚を釣ったり野球をしたりなどしていた。女子のグループに混ざって遊んだという経験は全くなかった。男女混同の遊び、たとえば陣取りゲームでは、男子が攻め、女子が守りの位置に立つのが不文律だったが、僕はその流れで自然に『女子』でありながら攻めの方を任された。

その頃から僕は、緩やかな混乱の中にいた。小学生は性差に左右されないことが多いのに、あるとき、思い出したように性別の区分けを押しつけられる。「そうか、僕は女だったのか」という、実感のない現実を飲み込まれる。運動会のフォークダンス、水泳の着

替え、そして、保健体育の授業。

その保健の授業で生理について知らされたときは衝撃だった。さらに衝撃だったのは、実際に初潮が訪れたときだった。小学校卒業目前のときだったかな。数年後に地球が滅亡しますと言われて、本当に滅んでしまうような心境だ。

母は勝ち誇ったような顔で、僕の頭を撫でた。

「これからはもっと、女の子らしくしなきゃね」

四月から中学校に通えば、もちろんそこで制服のスカートを着ることになる。それに合わせて心の方も女の子らしくならなければいけない、母はそう言った。

まるで現実味がなかった。なにかの冗談としか思えない。君たちも想像してほしい。例えば、「これからはもっと日本人らしく、毎日着物を着て生活しなさい」と言われたらどうする？　まるで現実的ではない、それはなんの冗談だ、となるよね。人格を偽り、誰かに媚びを売って生きていけと言ってしまうものだ。たしかに僕は日本人かもしれないけれど、僕にとってはそういうものだった。

それでも我慢するしかない。義務教育を前にして、僕の矮小な反発が通るとは到底思えない。反発できるほどの思考力も語彙もないのだから。耐えるしかなかった。

小学生までの僕は、知識としては理解しつつも、いつか自分にもペニスが生えてくるものと暗示的に思い込んでいた。今はお腹の中に引っ込んでいるだけなのだ。

それまで僕は地区の少年剣道部に所属し、竹刀を振りながら、やり過ぎだというくらいに声を出して喉をがらにしていた。いかに男の子っぽい声を出せるか、躍りになっていったんだ。子供なりにトレーニングをして体を鍛え、雑誌に掲載される上半身裸の男性モデルのような体型を目指した。あるときは立ち小便の練習をしたり（汚い話で申し訳ない）、鏡の前でジャッキー・チェンのまねごとをしたりなどして、一人悦に浸っていた。

客観的に、いや誰がどう見ても、僕はそんな痛々しい女子小学生だった。

中学校へは、行ったり行かなかったりだった。いじめられ出したのと、一層強まる「女の子らしさ」の強要に、息が詰まったからだ。

中学生にもなると、僕ほどじゃなかったにしろ、みんな性について敏感になっていく。そんな中、僕ひとりが異性の振りをすると当然鬨を貰うだろう。気味悪がられるし、前述どおり、軽いいじめも受けた。女の子全員から無視されたり、僕のことを面白がる男子から体を触られたり。それなりに酷いものだったけど、より辛かったのはいじめそのものじゃなく、環境がもたらす「性別の区分け」に他ならなかった。

ある種の転機が訪れたのは高校一年の終わり頃。そのころになると僕はすっかり擬態に慣れていた。僕の人生において、髪がもっとも長い時期だった。

積極的に女の子の友達を作り、ファッション雑誌を読みあさり、化粧を少々嗜む程度のこととはした。こう書くところごく一般的な女子高校生のように思えるが、僕にとっては吐き気すらこみ上げてくる行為だった。

以前、大学の飲み会の余興で無理矢理女装を強要された可哀想な一年生がいたが、僕は不快感しか覚えなかった。しかも彼とは違い、当時の僕は年中無休、いつときも休まず女を演じ続けたわけだから、学生でありながらまるで肉体労働でもしているような気分だった。

「心の性」と「体の性」の区別すら出来ないまま、あるいは根幹にある小学生の頃の憧れを引きずったまま、それこそ全身スーツでも身にまとうみたいに、女の子を着て生活する。僕は正常じゃなかった。無理を押しして継続した結果、少しずつ、歯止めが利かなくなっていた。

中学校三年生のときに付き合いはじめたボーイフレンドを片手に持て余しにながら、また下品な話になるけれど、その間、何人もの男性と寝た。同級生、後輩、年上の高校生や、ときに教師をひっかけたり。

好きという感情もなく、彼らに異性としての愛情や欲情を抱くわけでもなく。ただ、脳の表面だけで本能的に彼らの肉体を求めた。二、三度痴漢に合ったこともあったけど、おかしな話、ちょっと嬉しくもあった。僕は女になれたんだってね。

歯止めが利かないというのはこういうことで、僕は「女らしさ」を求めるあまり半ばやけになって、下衆な俗物になり果てた。

そして高校一年の終わり、付き合っていたボーイフレンドから別れを告げられた。どうして振られてしまったのか、今でもよく分からない。浮気がばれた風でもなかったし、僕はそれまでずっと、必死に「女の子」を演じ続け、実際モテてさえいたわけだから。ただど唐突、別れを宣告された。

それがきっかけだった。家に帰ったとき、今まで我慢していた吐き気が急にこみ上げてきて、僕はトイレに駆け込んだ。何十分か吐いて、水道水を飲み、また吐いて、その繰り返しで一時間以上。時期じゃないのに、子宮が悲鳴を上げるようにうずいていた。

夢から現実引き戻されたようだった。頭の裏側に次々と飛び込んでくる。今まで寝た男たちの顔だ。うずいた子宮は生々しい感覚となつて異物の挿入を思い出していた。今まで寝た男たちの、体の一部だった。

僕はここで、ようやく自分の勘違いに気づいた。自分は女になり、やっと「自分らしさ」を見つけたんだと思っていたが、本当はそうじゃなかったのだ。

僕は、「自分らしさ」から一番遠いところにいたんだ。

その日の夜、僕は両親に泣きついた。小学生以来、久しぶりに「男になりたい」と泣いて叫んだ。ちょっと頭がおかしくなっていたみたいで、いつの間にか、ハサミで自分の髪をめちゃくちやに切り

詰めていた。僕がそれに気づいたのは、泣き止んでずいぶん経ってからだったけど。

一年近く休学し、精神科と自宅を往復する毎日が始まった。僕は一言も口が利けなくなり、いろんな症状に悩ませされた。円形脱毛症や十二指腸潰瘍、蕁麻疹や多汗症などといった、ストレスによる身体症状。

病院へ行く以外、滅多に外には出ず、部屋に引きこもってばかりだった。僕は、他人の顔、そして視線が恐かった。ボーイフレンドに振られてからというものの、僕はずっと男物の服を着て、髪を短くしていた。小学生のときのように。

だけど、僕の体はもう女のものだった。声は成熟した女性のそれに近づき、胸は隠しがたいほどに膨らんでしまった。

病院まで向かう電車内は苦痛でしかなかった。いちおう男物の服を何枚も着重ね、胸を隠し、一見して女には見えないほどの短髪をしている。帽子も毎日被った。顔だってそうだ。僕はもともと男性寄りの顔立ちだったから。

だが、自分は本当に男に見えているだろうか。男装がばれてはいないか。本当はばれていて、みんな心の中でせせら笑っているんじゃないか。そういう被害妄想が頭から離れない。

自信や自我というものは完全に折れていた。男物の服は水を吸ったように重く、また、女としてのスパンが長かったためか、自分にはひどく着ぐるみ的に感じられた。他人と目を合わせず、必死に顔を隠すように生きるしかなかった。

今の自分はどこにいる？

そんなことばかり考えていた。体はともかく、心の話で。中学から今まで女に成りきり過ぎたために、そのときの僕は、「自分らしさ」をどこにも置くことが出来なかった。

当時はそれどころじゃなかったけど、今思うと、そのときの親の

顔つたらない。僕のせいで父は気を使い、極力顔を伏せ、なるべく僕に関わらないようにしていた（男性へのコンプレックスが最も強い時期だったからだと思う）。一方の母は、今まで自分が「女の子」を押しつけてきたことに自己嫌悪した。

僕が中々学校に行けないものだから、やがて転校を余儀なくされた。むろん普通の共学校じゃない。私服登校が認められる、隣県の私立高校だ。

男性の格好が出来ることに開放感があつて、少しずつではあるが、精神面も回復してきた。友達は一人も出来なかつたし、相変わらず人の顔を見ることすらままならなかつたけれど、僕はもう構わなかつた。他人の顔など、もう見なければいいのだ。

高校生活も終わりを迎えると、ある程度落ち着いた僕は、改めて両親と向き合い、真剣に話し合つてみた。「男になりたい」と。今度こそ、まともに順序立てて意志を主張した。

母は何か憑き物が取れたみたいに、それでも涙をこらえながら、こう言った。

「世間はこういうことに寛容じゃないけど、それでも、絶対後悔しないって言える？」

父は何も言わず、ずっと顔を伏せていた。僕も同じように顔を伏せ、幾分小さくうなずくと、父もやはり同じようにうつむいたまま、声もなく泣いた。

今こそ僕は、こうしてなんでもないような顔をして生きていくけれど、過去をさかのぼってみるとなんと滑稽で不完全だ。でも、事実がそうなんだよ。情けないけれど、これが僕なんだ。

話を戻そう。男になりたいというものの、具体的にどうするのかという問題に突き当たつた。やはり僕らだけの力じゃどうにもならないから、必然、医学を頼ることになる。精神科で性同一性障害の診断書を貰い、ホルモン療法を始めた。

一度目の注射はなんともなかつたが、二度目、三度目と続けていくうちに、徐々に変化が見られた。変声期に入り、ホルモン摂取の

たびに声が低くなる。胸も小さくなっていく。四、五本目の注射で、生理は途絶えた。それが僕と、「女らしさ」が切り離された瞬間だった。「女性化」という、受け入れ難い過程を一日ずつ巻き戻していくように。出来上がったばかりのセーターを、一糸ずつほどいていくかのよう。

一番実感としてうれしかったのが、口元やあごに生えてくるひげだった。普通の十代後半に比べればとても薄く、一見して生えているかどうかも分からない程度だったけど。このまま伸ばしっぱなしにしてもいいと思ったが、もうひとつ、僕はひげ剃りにも憧れていた。五日に一度のひげ剃りは、僕の生き甲斐となった。

親元を離れ、上京して大学に入ってから、月に二度のホルモン療法を続けた。もちろん、高校生まで持っていた数少ない女物の衣服は、一着たりともこちらには持ってこなかった。新しい自分として生きていくためだ。

上京した理由もそういうことだった。僕が女だと知る人は一人もない。学籍は女で登録されているが、大学はもつと自由で、匿名性には事欠かなかった。僕が男である限り、うまく擬態し続けられる限り、大抵の人間は僕を男性だと信じて疑わなかった。

そういえば、近頃ふと気づいたことがある。

電車に乗っていると、少し心が軽くなっているんだ。

いつからか、僕は人の顔をよく観察するようになっていた。人から目を逸らし続けた僕にとって、それはとてつもなく大きな変化だった。不思議なもので、体の変化は直結して心にまで影響してくみみたいだ。

今までのことが嘘みたいに僕は人の顔が好きになり、その精巧さに深い造詣を持つようになった。顔に関する専門書を買集め、電車に乗っては他人を観察し、あの人はああだ、この人はこうだという具合に、趣味や娯楽として人の顔を楽しむようになった。反動つ



てやつなのかな、何にしても不思議なことだ。

ねえ、日野さん、吉村くん。ここまで書いてやっと気づいたんだけど、君たちに一つ、謝り忘れたことがあったね。どうやら僕は、君たちを騙っていたことになるらしい。僕は直接口にして自分を男だと名乗った覚えはないが、『岡本清』という偽名を使ったことには違いない。これじゃ騙していたのと同じだ。大変遅れてしまったけど、嘘を吐いてごめんなさい。

こうして謝った上で弁解したいのだけど、僕は決して騙すつもりで性別を偽ったわけじゃない。僕は日常において常に嘘と共存していて、もはやその嘘に慣れてしまっている。嘘を嘘だと思わないし、意識しなければ自分でも気付かない。自分が男だということを疑わない。そんな歪んだ心身状態にあるんだ。

さつき、高校時代の話で、『全身スーツでも纏うように女の子を着て生活した』と表現したけど、変な話だよね。女の子を着るものにも、実際僕は女なわけだから。異性を着て生活しているのは、今の僕なんだろう。

さて、ここまで長くなってしまったけど、重要なのはここからだ。第一の転機が初潮で、第二の転機がボーイフレンドに振られたことだとしたら、第三は丘本静香との出会いになるだろう。

## 十話・彼／彼女の手紙（中）

出会いといつても大層なものじゃない。

ホルモン療法を始めて七ヶ月。『岡本清』おかもとせいという偽名を使い出して数ヶ月。まあ順調に、男性としての生活に慣れ始めた頃だった。

しかし、偽名はしょせん偽名でしかない瞬間というものがあって、僕の場合その瞬間が初めに訪れたのが、歯科医への通院だった。受付のたびに保険証を提示するわけだからね。国の正当な医療を受けるとなると、こればかりはどうしても誤魔化せるものじゃない。

せめて大学やバイト先の知り合いには『女』を意識されたくないものだから、彼らに見つからないよう、遠くの歯科医へ通うことにした。電車で一時間近くのところにある都内の小さな医院だ。

キャップを深く被り、なるべく中性的な格好をして（パーカーやジーンズなどといった無難でどつちつかずな服装だ）、そのときはっかりは他人の顔をこっそりと観察するような真似は控えておいた。受付を終え、待合いの長椅子に近づいたところで、おや、と僕は思った。少女が一人、膝に白く短い棒を乗せ、置き物みたい座っていた。視覚障害者用の伸縮杖だ。少女はそれを両手でしっかりと、大切なお守りみたいに握りしめていた。

おや、と僕が思うのも無理はないだろう。白杖を持っていたから、というわけではない。彼女は当時、眼鏡と眼帯を着けていた。近くに寄ればすぐ分かるほど厚いレンズだった。左目は眼帯で隠されている。右目は瞼を伏せ、じっと下方へと向けていた。さらに、前髪はこれもでかっけくくらい長くて、ほとんど目元を覆い隠すほどだった。そのため、顔の上半分は非常に混雑した印象を受けてしまう。

僕はひどく疑問に思ったものだ。つまり どうして彼女は単独で、介護者や付き添いの一人もいないんだらうって。

僕は少女の左隣のソファに座った。それなりに混んでいたけど、そこ以外空いていないということもなかった。したがって他の場所

に座ることも出来たが、まあ、そこは下心つてやつだね。僕は、少女の表情をもう少し観察したいと思っていた。

彼女の左隣を選んだ理由もそういうことだ。眼帯をしている方で、完全な死角だったから。

携帯電話を操作する振りをして、ときおり少女の横顔を盗み見た。当然、眼帯を着けた左目の様子を推し量ることは不可能だが、もう一つのポイント、口元や頬を観察することはできる。少女の唇と頬は、固く緊張していた。少なくとも僕にはそういう風に見えた。

意地悪な好奇心が働いて、ちょっと首を伸ばしてみる。あくまでそつと、彼女の顔を見えることにした。伏せた右の瞼、その先に伸びる長い睫毛は小刻みに揺れていた。

さらに眺めていて、そこで僕は、思わずぞつとする。

瞼の間から覗く瞳の色に、いささかおののいてしまったからだ。一瞬、白のカラーコンタクトでも着けているのかと思つたが、障害を抱える人間がそのようなお洒落をする余裕などあるはずがなかった。

彼女の右の瞳は、使い込んだチューブから出てくる白い絵の具のような、あるいは、純白の石像が日なが一日、酸性雨にでもやられたかのような、そんな退廃した色をしていた。

僕はそれ以上の観察を止めた。彼女も幸い、僕の視線に気づいた様子はなかった。

改めて考える。どうして少女は一人なんだろうと。顔の緊張、揺れる睫毛や濁った瞳、そこから読みとれるのは肉薄した怯えだった。僕に専門的な知識はないが、彼女の右目はほとんど見えていないのだろうと思つた。左目同様、右目に残るわずかな光も、近いうちに途絶えてしまうのだろうか、と。

そんなときだった。「オカモトシズカさん」と、受付看護師が呼んだ。ソファを立ったのは、隣の少女だった。まるでお尻でも蹴られたみたい、大きな音を立てて弾くように立ち上がった。僕はその勢いにひるんで、啞然として佇立する彼女を見上げた。

案内係がやってきて、「ああ」と言つて少女を見た。

「お待たせしてすみません。お先に、こちらのオカモトさんからご案内しますので」

少女は混乱した様子だった。伸縮杖をぎゅっと握りしめ、顔を左右にやっている。こちらのオカモトさんって、どちらのオカモトさんだろう、という風に。

見かねた僕は立ち上がり、なるべく少女の右目の視界に入るようにした。

「すみません、僕」慌てて言い直す。「私も、オカモトシズカって名前なんです」

言い忘れていたけど、当時の僕の声はそれはもう酷いものだった。ホルモン療法特有の変声で、妙な高音で掠れていたんだ。「私」という一人称を使ったのもその高い声を利用したからで、またおかしな混乱を彼女に抱かせないためでもあった。オカモトシズカといういかにも女性の名前の人間が『僕』というもおかしいからね。

少女はやっと納得して、些少の動揺を残しつつも長椅子に座りなおした。彼女はぶつぶつと何か呟いたけれど、僕には上手く聞き取れなかった。

診察を終えて待合室に戻ると、彼女はもう居なかった。おそらく診察中なのだろう。別段気にせず僕は歯科医院を後にした。

僕は、弱視者および視覚障害者というものの存在を知識として知っていたが、実際に目にしたのは初めてだった。見たところ少女は十七か十八といったところだろう。まだ若いのに、世の中には不憫な人もいるものだ。僕はその程度にしか考えていなかったし、学生寮に戻ったときにはもう、少女のことは記憶の片隅に追いやられていた。

先程言った通り、僕らの出会いはこうした何気ないもので、決して大層なものじゃなかった。そのファーストコンタクトが彼女にとつてどうだったかは知らない。だけど僕自身は、もう二度と彼女に会うことはないだろうくらいにしか思っていなかったから、や

はりそれは『何気ない出会いだった』と表現するしかない。

が、二度と会うこともないってのも安易な考えだった。

菌の治療というものは、一度行けば終わりなんてことは滅多にない。大抵の患者は幾度かの通院を経て完治させるものだし、それは僕も彼女も同じだった。二度と会わないなんてことは、必ずしも言い切れるものではない。

僕が二度目に少女を見たのは、あれから三週間ほどがしてからだった。

前回と同じく、少女は先に受付を終え、既に長椅子に座っていた。少女を認めたとき、僕はひどく哀しい気分になったのを覚えている。少女はもう、眼鏡や眼帯を着けていなかったのだ。それが意味する所はひとつしかない。僕は、なにか世界の終わりを見たような心持ちで、少女のはす向かいの長椅子に座った。しかし実際に世界の終わりを見たのは、僕ではなく少女の方だろう。少しずつ途絶えていく光の残滓を僕は想像してみた。それはとても虚しく、多大な無力感のする光景だった。

僕は斜め向かいから少女を見ていた。少女は両目を閉じていた。もう自分には使う必要のないものなのだというように、完全に閉じていた。前髪はやはり長く、瞼に半分かかっている。以前は何の感想も持たなかったが、もしかして彼女は、あの長い前髪でなるべく顔を隠そうとしているのだろうか。根拠もない憶測だったが、僕はそう思ってしまうのだった。

「オカモトシズカさん」と名前が呼ばれる。

今度はどっちが先だろうと身構える。それに反して、少女は今回も瞬時に立ち上がる。だが、案内係の看護師が僕に視線を送っていたから今回も僕が先なのだと分かった。障害者が相手なのだ、診察にもそれなりの準備を必要とするのだろう。

少女は拳動不審に杖をいじって、案内係を待っていた。僕は少女

に近づき、彼女を驚かせないように、「今回も僕が先だよ」と小声で教えてあげた。

少女は納得しかけて、小首を傾げた。しまったと僕は思った。というのも、僕の声は三週間前と比べてたいぶ落ち着いており、より男性に近づいた声となっていたからだ。そんな声が『今回も僕が』と言っただから、彼女が困惑してしまうのも当たり前だ。

気まずい思いで、それでも僕は「じゃあお先に」と残して診察室へと向かった。

歯科医院から出ると、僕は医院の正面にあるコンビニで煙草を吸った。すぐには帰らなかった。今度こそ、あの少女のことが気になったからだ。

やがて少女が医院から出てくる。やはり彼女の周りに付き添い人の姿は見られない。伸ばした白杖で地面を突っつきながら、たった一人で街道を歩いていく。失明して間もないからだろう、足取りはまるで慣れた風ではない。僕は煙草を消し、道路を渡って少女に近づいた。

少女の隣に並んでゆつくりと歩く。僕が隣を歩いていることなど、気付いてもいないみたいだった。歩くこと一点に集中を向けているのか、もしくは目の見えない状態に慣れていないだけなのか。どちらにせよ見ているだけで危なっかしい。

「ねえ」と声をかけてみる。

少女は靴底を踏みつけるように、その場に急停止した。そのせいで地面を突いていた白杖がしなり、嫌な音を立てて跳ね返った。折れたかと心配したが、白杖の先は軽く震えているだけで、損傷はないようだった。

「だれですか！」と少女はどなる。顔をあちこちに向けて、不安そうに眉根を寄せていた。

「ごめん、いきなり声かけて。怪しい者じゃないから安心して」

通行人の目が集まる。それで僕はかなり焦ってしまい、そのまま逃げだそうかとも考えた。やがて彼らは、見てはいけないものを見たように僕らから視線を逸らした。

少女はあらぬ方向に顔を向け、何かを小声で呟いた。急いで耳を傾けたが、「名前を」としか聞き取れない。

そうか、と思う。さっき大声を出したのは、彼女が身の危険を感じたからではない。ただ、相手との距離感が掴めなかっただけなのだ。

「僕は岡本静です。ほら、さっき歯医者さんと一緒だった」

少女は二度うなずく。「私と、同じ名前の人」と付け足すように言った。

余談だけど、彼女は最初、僕たちの名前を同姓同名だと思っ込んでいたらしい。つまり、僕の名前も『丘本静香』と書くんだってね。彼女がこのことに気付いたのは、だいぶ後の話だけだ。

なるべく親しみやすい声色で、「一人？ 付き添いの人はいないの」と尋ねてみた。

少女は首を振った。「いません。一人です」ときっぱり答えた。身体障害者らしくないといえば失礼かもしれないけれど、それにしちゃ気の強い子なんだな、と僕は思った。

「家は近いの？」

「近いです。歩いて十分もかかりません」

「それは近いね。でも、もしよかったら手伝うよ。その方が安全だし、もっと早く帰れる」

「大丈夫です。私、一人で帰れます」

「いや、でも」

「いいいたら、いいんです！」少女はまた声を張り上げた。

再び周りの視線が集まってきて、僕の気力はそこで完全に喪失した。「ごめん」と言って、もう立ち去ることにした。僕は彼女の態度にひどく傷ついたし、少しだけ腹も立っていた。純粋な親切心を拒絶されることほど気分が沈むこともないだろう。

数メートルほど歩いたところで、僕は少女の声を耳にした。

「あのう」

届くか届かないか、その声量は微妙だった。僕は振り返り、少女を見返した。

「あのう、やっぱり……」と、彼女は顔を赤らめ、小さくうつむいた。

道中、会話らしい会話はなかった。僕の腕を掴む少女は、恥ずかしそうに下を向いていた。僕としても話しかけづらい雰囲気だったのだ。

自宅まで連れて行くと、玄関の前では少女の母親らしき人が立っていた。彼女はきよるきよると辺りを見回していたが、僕らを見つけると一目散にこちらに駆けてきた。

僕は安堵の笑みを浮かべて少女を示す。次には、駆け寄ってきた母親によって、少女は平手打ちで頬を叩かれた。

「まだ一人で出歩くなって、あれだけ言ったのにな」  
そして彼女は僕を見た。その当時、大方の人間がそうであるように、彼女も僕の性別を計りかねているようだった。僕は逡巡し、自己紹介をした。歯科医で少女と知り合い、心配になってここまで送ってあげたのだと。

少女の母親は、声質によって僕を男だと判断したようだ。怪訝に顔をしかめ、僕の言い訳じみた話を聞いていた。

「それはご親切にどうもありがとうございます。でもねあなた、いくらこの子の目が見えないからって、こんな知り合いでもない年頃の女の子に声をかけて、不審者だと思われても仕方ありませんよ。私は充分、感謝していますけど」

とても感謝しているという風には聞こえなかった。またも親切心を無下にされ、傷ついたり腹が立ったりしたが、彼女の言うことも分からないではないので大人しく引くことにした。小さく頭を下げ、



その場を後にした。

男になることを不便に思ったのは、それが初めてだった。

それでも歯科医院でたびたび会う少女を放っておけず、僕はその都度、彼女の帰宅の手伝いをした。もちろん、彼女の母親に見つからない場所までだけだ。

少女はいつも一人だった。あんなに叱られたにも関わらず、彼女は頑として一人で通院することをやめなかった。

少女は僕のことを「岡本さん」と呼んだ。僕はずっと彼女を「君」と呼んでいたのだが、ある日の帰り、彼女は自分のことを名前で呼んでほしいと言った。

「私はあなたを上の名前で呼ぶので、あなたは私を下の名前で呼んでください。その方が、ややこしくないでしょう」

さらに彼女は「さん」や「ちゃん」付けは嫌だと言った。仕方なく、静香と呼び捨てることにした。

ねえ、信じられるかい二人とも。静香、昔はかなりわがままな子だったんだよ。静香が毎回母親の手を借りず歯科医へ通院していたのも、彼女は「早く一人で歩けるようになりたいから」と言っていたけれど、僕には、あのきつい母親に反抗したかっただけにしか思えなかったな。僕とは二つしか違わないのに、年齢差以上に静香は子供に見えたものだ。

そつだ、大事なことを書き忘れていた。

静香との一度目の出会い、そして二度目の出会いで、僕は女の顔と男の顔をちぐはぐに使い分け、静香を困らせてしまったと書いたね。彼女はしばらくあの件について追求してこなかったが、第一印象というものはやっぱり記憶に残るものだ。お互い治療も終わりが近づいてきた頃、彼女はやっとその件について尋ねてきた。

「岡本さんって、最初自分のこと『私』って言ってましたよね。あれ、なんだったんですか？」と、率直に。

僕たちは近所のカフェでテーブルを挟み、互いに生温かいコーヒーを飲んでいた。暑い夏だったけど、歯の治療後だったから冷たいものは飲めなかった。

一から説明するのも時間がかかるから、僕は嘘を吐いて誤魔化すことにした。

「あのときは風邪を引いていたからね。声がへんに高くなっていたんだ。ほら、僕って名前も女みたいだろう？ 面倒だし、女ってことにしておこうかと思ってね」

誤魔化し笑いでそう答える。静香からの返答は、すぐには来なかった。眉をひそめ、口を軽くとんがらせている。それは、人が不機嫌を現すときにする表情だった。

「私、岡本さんとはもつと長い付き合いになると思いますけど」そして彼女は悪戯っぽく笑うのだった。「今のうちからそんな嘘吐いて、大丈夫かなあ」

僕は知らんぷりでコーヒーを啜った。彼女は一体どこまで見抜いているのだろう。気になるところだったが、自己防衛のため敢えて聞かないようにした。

しばらくのち、静香が話題を変えた。

「ねえ、歯が治ったら、好きな物いっぱい食べたいですよ」

「そうだね。たしかにそうだ。静香は何が食べたい？」

「私、たこ焼きがいいです。昔から好きなので」

好きじゃなくて、好きだと言い切るところがおかしくて、僕は思わず笑ってしまった。静香は素直な疑問を顔にしていた。

「たこ焼きが食べたいって、そんなに変ですか？」

「いや、別に」

「じゃあ岡本さんは何食べます？」

「たこ焼きかな。僕もたこ焼きが大好きだから」

僕は相変わらず笑って言った。静香はむっとして、半ば押しつけ

るようにこう言った。

「食べたいものが同じなら、治ったら一緒に食べにいきましょう。たこ焼き」

やはり僕は小馬鹿にするように「たらふく食べよう、たこ焼き」と答えた。

いや、きっかけというものは案外強い魔力を持つてるね。このふとした会話のおかげで、最初は冗談だった静香も、結局最後は僕のことを、完全に「たこ焼き同志」だと思いついたようになった。あまり大きい声じゃ言えないけれど、実は僕、いまだにたこ焼きなんて人並み程度にしか好きじゃないのにな。

僕らは携帯で連絡を取り合って、電話で互いの治療経過を報告しあった。それで、お互い同時期に治療を終えるよう、予約を調整した。

二人ほぼ同時に通院を終えると、その翌日、待ちかねたように僕たちは二人で出かけた。

ショッピングデパート前の広場で、ほとんど毎日、たこ焼き屋台が出ていることを静香が教えてくれた。僕らはたこ焼きを二パック買い、その近くの公園でつまむことにした。

僕はたこ焼き二パックをかかえ、静香を二の腕に掴ませて歩いた。静香は両手で僕の腕を強く握っていた。彼女がたこ焼きへ寄せていた期待が予想以上だったことを僕は知る。

公園のベンチに並んで座って、パックを開く。片方を静香に渡し、爪楊枝を手に持たせた。僕は僕でもう一パックを開く。

いただきます、と声をそろえて言った。我々は静かに、じっくりと味わうようにたこ焼きを食べた。

「おいしいです」と静香は言う。

季節は秋だった。公園の敷地をいっばいに枯れ葉が覆い、ひらひらと落ち葉が舞っていた。僕はたこ焼きを頬張りながら、静香のパ

ツクに落ち葉が落下してこないよう、細心の注意を払って見つめていた。静香は爪楊枝でたこ焼きを探るように刺し、そっと二個目を食べた。

「たこ焼きって、一石二鳥ですよ。一個で二度おいしい」

「なにそれ。どういうことかな」

そして僕は沈黙する。

僕は静香の手元を見ていた。たこ焼きに落ちたのは枯れ葉ではなく、静香の涙だった。断言して言うけれど、静香の泣き顔を見たのは、これが最初で最後だった。

「だって、食べてもおいしいし、見た目だって、すごく可愛いじゃないですか」

僕は何も言えない。ただ、彼女の閉じた瞼からこぼれる涙を、黙って見ていた。

「丸くて、ころころしていて、それがいっぱい並んでるんですよ。これに可愛いお口とか、ちっちゃいお目めとか付いたら、そんなの私、可愛すぎて、絶対食べられません」

そして静香は僕へと顔を向けた。たこ焼きのパックを差し出して、僕によく見せた。

「ねえ岡本さん。たこ焼き、丸いですか？」

「丸いよ」

「可愛いですか？」

「可愛いよ。すごく」

彼女の手は震えていた。今にもたこ焼きのパックを取り落としそう。僕はその手からパックを受け取り、ふたを閉じた。二つのパックを重ねて、二人の間に置いた。

「じゃあ、岡本さんはどんな顔をしていますか」

「僕は……」

静香の手は、僕の顔へと伸びていた。いつまで経っても僕に届かないから、彼女の手を取り、頬に触らせた。静香の手はゆっくりと僕の頬を撫で、薄いひげの生えたあごを触り、唇を通って、鼻をな

ぞつた。やがて、目元に触れる。

「泣かないでください」

僕は首を振った。静香の手のひらは少しずつ濡れていく。彼女の  
手を取り、離させた。

「僕の顔は見えた？」

「ぜんぜん、見えませんでした」顔をうつむかせる。「でも、頭の中  
には、いっつも流れ込んでくるんです」

「流れ込んでくる」

「人の顔、風景が、いつまでも消えてくれないんです。半年前まで  
私が見てきた、みんなの顔。目を閉じてても開いていても、電車の中  
でも、歯の治療中も、何かを食べていても、お風呂に入っても、  
顔と風景の洪水が消えない。私の世界は半年前で止まったまま。忘  
れたくても忘れられない。どうしよう岡本さん。私、そのうち頭お  
かしくなっちゃう」

静香はベンチを立ち、僕の胸に顔をうずめた。その拍子にたこ焼  
きが転がり、枯れ葉の地面に落ちていく。彼女はぎゅっと目をつむ  
り、僕の胸へと顔を押しつけた。頭の中を浸食する洪水を押し殺そ  
うとするように、強く押しつけていた。

「景色の中に、岡本さんがいない……」

まだ乳房の縮みきっていない、僕の胸に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3804x/>

---

ペルソナの笑み

2011年11月1日03時10分発行